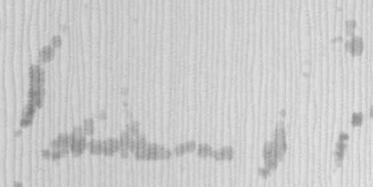


臼田町埋蔵文化財調査報告書第8集

七曲り下遺跡

—中世山城沿いに展開する土坑墓の調査—



平成 7 年 3 月

長野県南佐久郡臼田町教育委員会

序

臼田町教育委員会
教育長 新津真澄

七曲り下遺跡は、臼田町の西北方片貝川の左岸に迫る段丘崖上に所在し、この崖下南に曹洞宗医王寺がある。頂上崖端に堀切を隔てて本郭、二の郭が南北に並び、本郭の北端に大堀切が設けられている。更に西方およそ800mの山頂には、経塚や古墳があって「上ノ城」と名づけられ、烽火台跡と伝承されている。

この遺跡は、医王寺北方に隣接し、片貝川左岸と臼田山の山麓の狭くて細長い緩傾斜地に立地している。また、北方には荒谷遺跡、滝ノ沢遺跡が続き、南方には医王寺城跡、下ノ城遺跡、寺久保遺跡があつて貴重な遺跡群をなしている。

臼田町教育委員会は、昭和63年6月に「町内遺跡詳細分布調査報告書」を刊行しているが、この報告書にも当該遺跡は記載されている。なお、臼田町は遺跡の東方に隣接する地籍で、第二靈園拡張工事に着手したところ、表層土から土器片が散見されたので、急処工事を一時中止して、埋蔵物発掘に切り替えた。

発掘調査によって検出された遺構は、土坑墓10基、住居跡1棟で、既に登録されていた弥生時代から平安時代にあたるものではなく、今から500年前の戦国時代のもので、後方の医王寺城跡と関連のある遺跡であることが判明した。山城の周辺にこのような墓坑のみられる調査例は少ないので、その意味で貴重な資料である。また、出土遺物は北宗、明、朝鮮等の古銭のほか土器、石臼、ひき臼、砥石などで、ほとんどが破片となっていた。

このたびの発掘は、靈園造成にかかわるものであったが、戦国時代の墓坑等の一端をうかがい知ることの出来たことは、意味深いものがあった。それにつけても、調査担当者島田恵子氏はじめ発掘にあたられた皆さん、靈園工事現場から土器片を発見して連絡いただいた方、また万般にわたってご協力をいただいた関係の皆さんに感謝の念を捧げたいものです。

例　　言

1. 本書は、長野県南佐久郡臼田町大字臼田字加護石1914番地外に所在する。七曲り下遺跡の調査報告書である。
2. 本調査は、臼田町が計画した分譲墓園の造成工事に先だって、臼田町教育委員会が実施した。
3. 本調査は、長野県考古学会員三石延雄を団長とし、佐久考古学会員、地元臼田町の方々の協力を得て実施した。
4. 報告書作成のための作業分担は、以下の通りである。

現場遺構実測図作成 — 佐々木春蔵、油井秀雄、新津きし、油井千弘、島田恵子
遺構実測図の整理・トレース、遺物整理・実測図・トレース・図版作成 — 島田恵子
5. 本書の執筆は下記により分担し、文末に記して文責を明らかにした。

第1章 第1節・2節を丸山正俊副団長、第3節を島田恵子
第2章 第1節を伴野拓也、第2節を島田恵子
第3章 島田恵子
第4章 佐々木春蔵、油井秀雄、島田恵子
第5章 第1節を島田恵子、第2節を井出正義
6. 本書に掲載した遺構・出土遺物の写真は、島田が撮影したものを使用した。
7. 本書の編集は島田が行い、三石延雄団長が校閲・監修した。
8. 本遺跡の資料は、臼田町教育委員会の責任下に保管されて、臼田町文化センターに展示されている。町民の皆さんに広く活用していただきたい。

凡　　例

1. 各遺構の略号は次の通りである。 土坑——D
2. 住居址、土坑の記述は検出位置とその状況——平面形態——覆土——壁——床面の状態——柱穴——カマド——その他全体の観察——出土遺物の順に行った。
3. 本書における遺構実測図、遺物実測図の縮尺は、各挿図中に明記してある。
4. 水糸のレベルは各遺構毎に統一し、標高は工事の為設置した H=721.87mを基準点とした。
5. 図版中遺物の縮尺は土器・石器、約3分の1とした。その他は各図に明記してある。

なお、調査にあたり長野県教育委員会文化課指導主事市村勝己先生に御指導いただき、調査中は地元荒町・その他地区の皆さんにあたたかいで理解をいただきました。厚くお礼申し上げます。

本文目次

題字	臼田町教育長 新津真澄
序	" "
例 言	
凡 例	
本文目次 付表目次 挿図目次 図版目次	
第1章 発掘調査の経緯	1
第1節 調査に至る動機	1
第2節 発掘調査の概要	1
第3節 発掘調査日誌	2
第2章 遺跡の環境	5
第1節 七曲り下遺跡周辺の地形地質	5
第2節 考古学的環境	8
第3章 層 序	14
第4章 遺構と遺物	15
1 住居址	15
1) H 1号住居址	15
2 土 坑	19
1) D 1号土坑	19
2) D 2号土坑	19
3) D 3号土坑	24
4) D 4号土坑	27
5) D 5号土坑	28
6) D 6号土坑	29
7) D 7号土坑	30
8) D 8号土坑	30
9) D 9号土坑	32
10) D 10号土坑	34
3 遺構外出土石器	37
4 七曲り下遺跡周辺の出土遺物	38
第5章 考 察	40

1 七曲り下遺跡の土坑墓	40
2 医王寺城とその城主	42

付 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	11
第2表 七曲り下遺跡出土古銭一覧表	37
第3表 七曲り下遺跡検出土坑一覧表	41

挿 図 目 次

第1図 七曲り下遺跡地形図及び発掘区設定図	4
第2図 周辺遺跡分布図	10
第3図 七曲り下遺跡検出遺構全体図	13
第4図 七曲り下遺跡層序模式図	14
第5図 1号住居址実測図	16
第6図 1号住居址出土土器実測図	17
第7図 1号住居址出土石器実測図	18
第8図 1号住居址出土鉄器実測図	18
第9図 D 1号土坑実測図	20
第10図 D 2号土坑実測図	21
第11図 D 2号土坑出土土器実測図	22
第12図 D 2号土坑出土石器実測図	23
第13図 D 2号土坑上面出土石器実測図	24
第14図 D 3号・D 10号土坑実測図	25
第15図 D 4号土坑実測図	26
第16図 D 5号土坑実測図	28
第17図 D 5号土坑出土土器実測図	29
第18図 D 5号土坑出土石器実測図	29
第19図 D 6号土坑実測図	30
第20図 D 7号土坑実測図	31
第21図 D 8号土坑実測図	32
第22図 D 9号土坑実測図	32
第23図 D 8号土坑出土配石礫実測図	33
第24図 土坑内出土鉄器実測図	34

第25図 土坑内出土砥石実測図	34
第26図 土坑内出土土器実測図	35
第27図 土坑内出土礫石器実測図	36
第28図 土坑内出土古銭拓影図	37
第29図 七曲り下遺跡出土石臼実測図	38
第30図 七曲り下遺跡出土石臼実測図	38
第31図 七曲り下遺跡周辺出土茶臼実測図	39

- 図版 1 1. 七曲り下遺跡検出遺構全景（調査区北側） 2. 1号住居址、D 3号・D 10号
土坑全景
- 図版 2 1. D 1号土坑 2. D 3号・D 10号土坑 3. D 4号土坑 4. D 5号土坑
5. D 6号土坑 6. D 7号土坑
- 図版 3 1. D 2号土坑全景 2. 搗き臼、茶臼状石器出土状態 3. 配石状態
- 図版 4 1. D 8号土坑 2. D 9号土坑 3. 1号住居址土器出土状態 4. 1号住居址
骨・土器出土状態 5. 1号住居址骨（頭）出土状態 6. D 1号土坑の焼土・
炭化材
- 図版 5 1. D 5号土坑石器出土状態 2. D 7号土坑古銭出土状態 3. D 10号土坑遺物
出土状態 4. 医王寺日影堂の百番観音像 5. 調査区裏桜井氏墓地内の五輪塔
6. 医王寺境内の五輪塔残欠
- 図版 6 1. 鉄器 2. 砥石 3. 茶臼上臼状石器 4. 搗き臼 5. 磨石・凹石
- 図版 7 1. 内耳土器口縁部 2. 内耳土器底部 4. 石臼 5. 上臼
- 図版 8 1. 医王寺城の踏査 2. 地元の皆さんとの見学会スナップ 3. 地元の皆さんと共に
周辺の歴史的環境の踏査

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る動機

七曲り下遺跡は、臼田医王寺の北方に隣接して片貝川左岸にあって、一方に臼田山の山麓がせまる、狭くて長い緩傾斜面に立地しています。分布の範囲は、片貝川にかかる七曲り橋を中心にして、南北に約200m、幅は約30mであり、弥生・古墳・平安時代の遺跡とされ、ここからは、箱清水式土器、土師器などが採集されていました。

この遺跡に隣接して医王寺城跡があり、その関係で調査は注目されました。この医王寺城は、戦国時代に武田勢によって攻め落されたとの記録もあり、江戸時代には下ノ城と呼ばれていた山城です。

今回の調査は、臼田町が分譲霊園の造成工事を実施するのに伴い、現地一帯が遺跡包蔵地であり、その遺跡が破壊される恐れがあることから、臼田町・町教育委員会・調査団の三者で協議した結果、記録保存のために緊急発掘調査を実施する運びとなったものです。（事務局）

第2節 発掘調査の概要

- 遺跡名 七曲り下遺跡
- 所在地 長野県南佐久郡臼田町大字臼田字加護石1914番地ほか
- 発掘期間 平成6年6月15日～平成6年6月30日
- 調査委託者 臼田町 町長 井出毅雄
- 調査受託者 臼田町教育委員会
- 調査に関する事務局
 - 新津 真澄 臼田町教育委員会 教育長
 - 新海 宣幸 " " 総務教育課長
 - 中沢 功 " " 生涯学習係長
 - 丸山 正俊 " 文化センター 館長
- 発掘調査団組織
 - 団長 三石 延雄（長野県考古学会員）
 - 副団長 丸山 正俊（文化センター館長）
 - 担当者 島田 恵子（長野県考古学会員）
 - 調査員 井出 正義（長野県考古学会員）、佐々木春蔵（佐久考古学会員）

地形・地質・石質指導 伴野 拓也（中込小学校教諭）

調査補助員 有井忠雄（小海町誌編纂委員）、柳沢春子、油井秀雄、油井千弘、新津きし（以上臼田町の皆さん）

第3節 発掘調査日誌

○ 6月15日（水）はれ 県教委指導主事市村先生の御指導により、先ず試掘調査としてトレーナー掘りを行いその結果によって、本調査の日程および費用を算定することにして、本日よりバックホーが入る。

2mおきに幅1.5mのトレーナーを東西に4本入れて精査に入る。2・3本目のトレーナーに落込みを確認する。土器片、古銭片が各1点出土する。北側の部分は不安定な黒色の落込みがあるため全面表土削平を行うこととする。

○ 6月16日（木）はれ後雨 昨日の続きと、落込とおもわれるトレーナーの部分をバックホーで拡張する。本日は確認面から古銭、鉄器、砥石、焼成の固い無文土器片が出土し中世の遺跡らしい。また、焼土、炭化材も残っていて墓坑的様相が伺える。プランは地山層とあまり変化がないため確認は困難である。午後、雨がありその後をねらってプランのラインを引くが不安は残る。

○ 6月17日（金）はれ 土坑9基、住居址らしい落込みを1棟検出したため、このまま引続いて本調査に入る。D1～D4号、住居址の掘り下げに入る。D2号土坑から茶臼と搗き臼が出土したため、これでようやく中世の遺構であることが判明した。すぐ北側からは、弥生時代の土器片が表面採集されていたので中世とは考えていなかった。後背の医王寺城と大きな関わりのあることが分り、周囲の畑に横たわっている石を注意して見ると石臼の下臼破片が2個見つかる。

○ 6月18日（土）くもり D1号～D4号土坑、住居址のセクションをとり、ベルトをはずして仕上げにかかる。D3号土坑は東側に続いてもう一基重複していることが分り、D10号土坑とする。D3号から天禧通宝、D4号から永樂通宝が出土する。

住居址らしき落込みは、南西側の部分に壁が認められるが、北側はD3号・D10号土坑に切られ、東側は地形的に傾斜していることから耕作によって削りとられている。土器、鉄器、骨が床面直上から出土する。

本日から掘り下げに入ったD5号、D10号から共に砥石が出土する。また、D10号からは熙寧元宝が覆土上部から出土する。

○ 6月20日（月）くもり後はれ一時雨 D5号～D7号、D10号の掘り下げ。D1号～D4号、住居址内の土器、石器、礫の表面の泥を洗浄して仕上げとする。住居址とD3号土坑

の接点部分から頭の骨が出土する。火葬ではない生の骨なのでボロボロになりそうになり、取り急ぎ写真におさめる。3時から雨が降る。

○6月21日（火）はれ 本日は、昨日の雨で調査区内にくずれ落ちた土を清掃した後に、D 6号～D 10号土坑のセクションを取り、仕上げにかかる。D 8号土坑は底面に敲石とおもわれるきれいな石を6個と内耳土器の底部が敷いた状態に置いてあり、縄文時代と変りない土坑の様相に日本古来の墓に対する思想の伝統を感じる。

役場から建設委員さんと荒町の区長さんが見学に見える。

○6月22日（水）はれ 昨日ほんどの遺構が仕上がったので本日は各遺構の最後の精査と清掃を行うと共に、全体写真撮影のために清掃にも取りかかり2時までに終了する。

終了後D 4号～D 9号土坑までの実測を行う。

○6月23日（木） D 1～D 3号、D 10号、1号住居址の実測を終らせ、最後に全体測量を行う。器材をかたづけるが遺物は町民の皆さんの見学会のために、遺構の中にそのままの状態に置いてシートを厳重にかける。

○6月24日（金） 本日は、荒町、美里、諏訪町他の皆さんで組織している、西山を愛する会の皆さんが現地説明会をしてほしいとの熱心な依頼があったので、資料を作つて午後現場に向う。会長さんはじめ35人程の方々が現場に集合しており感激する。皆さん熱心に耳を傾けて一つ一つの遺構を見て廻る。

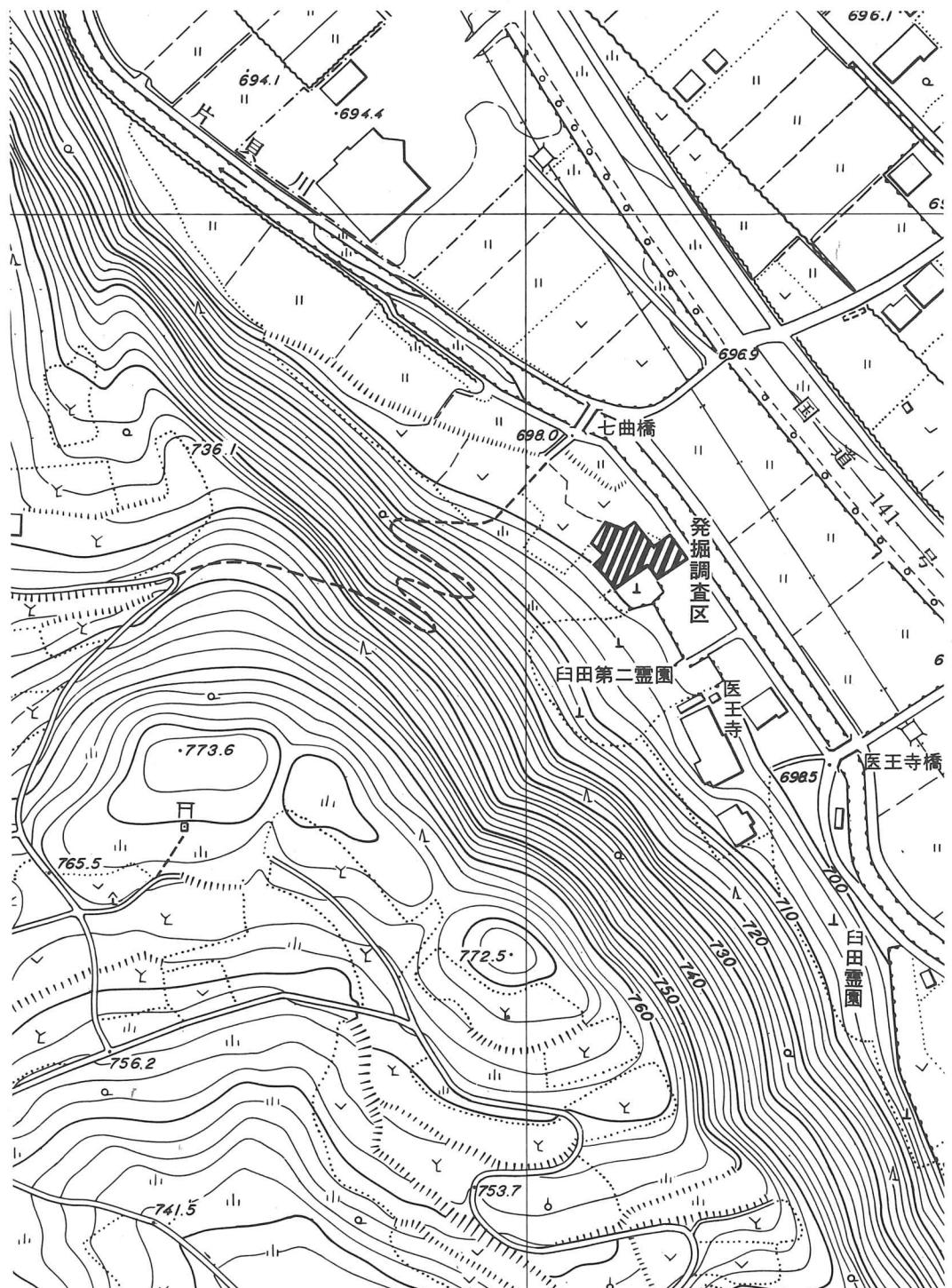
○6月26日（日）くもり一時雨 本日は町民の皆さんのための見学会を一時から開く。運悪く一時から雨が降り始める。それでも各地から30名程の皆さんが集つた。中には小学生のお子さんを連れた家族連れの方もいらっしゃり、小さい頃から郷土の歴史に接するよう親が心がけることは理想的な家庭教育であると思う。説明が終了しても皆さん立ち去りがたく熱心に見学していた。

○6月27日（月）はれ 本日は調査団と地元の西山を愛する会の皆さんと合同で、医王寺城と調査地区付近の地形、地質、歴史的環境の調査見学会を開く。

先ず最初に調査区のすぐ上の段に所在する墓地を見て廻る。桜井氏のお墓には五輪塔があり、墓石にも古い年号が刻まれている。この調査がきっかけとなって先日から文献の整理をして、初めて気が付いた医王寺城の由来がだんだん見えてきたようだ。島田 恵子

西山を愛する会の皆さんには、七曲り森林浴コースの遊歩道を整備したり、片貝川の清掃などにも取り組まれ、郷土の歴史を大切に後世に伝えていくことに努力されている。本調査も愛する会の皆さんパトロールによって実施されるに至った経過があり、その為に臼田町の歴史解明に大きな成果が得られた。（島田 恵子）

○7月～3月 図面整理、遺物実測、トレース、原稿執筆、編集、印刷、校正、報告書発刊。



第1図 七曲り下遺跡地形図及び発掘区設定図（1:7,500）

第2章 遺跡の環境

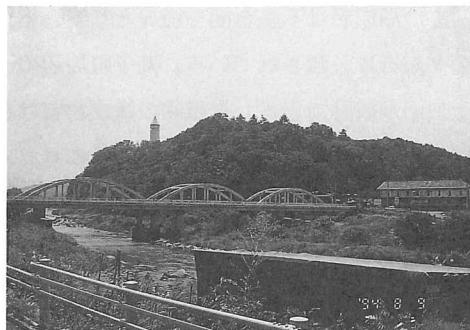
第1節 七曲り下遺跡周辺の地形地質

1 地質概要

臼田町、医王寺北側の遺跡は佐久平の一角に位置している。佐久平は佐久地方2市2郡にわたる広大な盆地である。その成因も火山性の堆積によるものや河川の侵食によるもの等があり地質的に一つの説明によることはできないので、ここでは、臼田町を北限とする南佐久地方に広がる盆地を佐久平として説明を進めるにした。

ここでいう佐久盆地を地形から眺めると、臼田町と佐久市の境界を東西方向を底辺とし、その南方向の小海町小海を頂点とする三角形の広がりを示している。そして、その中央を千曲川が北流している。臼田町の稻荷山、佐久市大田部地区北側にある離山が盆地の中に残丘状に見られるように、この盆地は千曲川による侵食平野と見ることができる。

臼田町において佐久盆地の東側には荒船山火
山系の溶岩台地の地形が見られ、東側には開析
は進んでいるものの、標高800m～1200mに高
位段丘が蓼科山火山の裾野地形に続くように広
がっている。この高位段丘は医王寺北側の遺跡
の後ろに段丘崖が見られる。段丘崖は佐久盆地
の西側を形づくり、佐久町から佐久市まで連続
して見られる。また、段丘崖には高位段丘の堆
積構造を示す露頭が各所で観察できる。露頭で



臼田町稻荷山・佐久盆地の中にできた残丘

観察できる地層は水平層で固結度は低く第四紀の堆積層である。また、水成層であることから現在の千曲川周辺に広く堆積した湖成層で分類的には八千穂層群といわれている。段丘崖の比高は30m～50mであることから、臼田町周辺での八千穂層群はかなりの厚さであることが想像できる。

八千穂層群の堆積終了時には現在の佐久盆地は八千穂層群におおわれていた。その後、千曲川及び、同系の河川による侵食によって盆地が形成されたことになる。

臼田町の遺跡から北側2kmの地点より佐久市大沢地区、前山地区の集落が、佐久平より、幾分高い地点に集落が見られる。この地点では明治初期において片貝川による洪水の浸水をまぬがれた安全な場所であったという。現在では千曲川水系による侵食は下方侵食が見られ、水平方向の侵食の洪水による侵水は見られないが、100年ほどさかのぼった明治時代にいたるま

で水平方向の侵食、いわゆる佐久盆地の形成は続いていたことになる。

医王寺及び遺跡についても、その場所は高位段丘崖の下に見られる小高い地形の上で、前述の佐久市大沢地区等と同じ地形である。この地形は一般に「崖錐地形」といわれている。崖の崩れによってできた地形である。

以上、この遺跡周辺の地質、地形の概要を述べたが、各地質、地形について説明を加えることをしたい。

2 八千穂層群

第三紀末期から第四紀中期（約1千万年～5百万年前）にかけて形成された湖成層である。現在見られる分布状況は蓼科山北部山麓から東部山麓にかけ、丸子町から小海町にかけ千曲川左岸にかけて高位段丘を形成している。段丘といっても水平面に近い段丘面だけではなく標高1200mあたりの蓼科山の直下に近い辺りまで分布している。蓼科山に近い標高800m～1000m以上においては開析が進み、平坦面をもつ地形は少ないが、ゆるやかな斜面をもち牧場あるいは高原野菜等の産業が展開されている。

この湖成層は不整合面を境界として、下位から「小諸層群」「八千穂層群」「南佐久層群」の3層群に分類されている。丸子町周辺の千曲川に沿って下流から上流にかけて、下位層から上位層が観察できる。堆積物の構成物質は各層群とも蓼科山ないしは八ヶ岳の火山活動による影響をうけ、大量の火山噴出物、特にロームを含んでいる。近年、ローム等の分類、分析により、層序のみならず、湖成層の形成に関わる、地史が確立されてきている。

八千穂層群は望月町から八千穂村にかけて、平面的に最も広範囲に分布している。北御牧村の八重原台地周辺において下位の小諸層群と不整合に接し、佐久町周辺において上位の南佐久層群と接している。また層の厚さも200～300m以上となっている。堆積物の特徴は、活発な火山活動を特徴づける凝灰角礫岩を大量に含む「小諸層群」、砂礫を主体としている「南佐久層群」に比べ、「八千穂層群」は砂岩、シルトとともに火山活動に伴う岩碎を多く含んでいる特徴がある。特に、臼田町周辺では砂岩とシルトの互層が明暗のあざやかな色彩の地層を示す露頭が見られる。また八千穂周辺では岩碎からなる厚い堆積層が観察できる。

八千穂層群の形成時期は洪積世中期にあたる更新世初期にあたるといわれている。それだけに、洪積世初期の小諸層群に比べ堆積物の固結度は進んでいない。また、砂層やシル



八千穂層群の砂層
医王寺北1kmの工事現場

ト層では含水層となっていることが多い、地下水の湧水が見られる。特に、遺跡がある高位段丘崖の下などでは各所に湧水が見られる。

3 佐久盆地

千曲川を中心としてその両側に広がる平坦部である。千曲川の氾濫原として形成された地形であるが、単なる平坦地形ではなく、低層位段丘が見られる。臼田町を例とすれば、第1段は臼田町市街、第2段は下小田切地区、大奈良地区といえる。さらに、勝間地区は第3段といえる。一般に段丘地形は地盤の隆起運動が断続的に働いたときにできる地形である。通常は河川による侵食は水平方向で行なわれ、平坦地形が拡大し、地盤の隆起が見られると下刻作用が始まり段丘地形が形成される。ここでの平坦地形は沖積世以降に形成されたものであることから、沖積世以降少なくも2回の地盤の隆起活動が見られたと考えることができる。もっともこれは千曲川を基準として考えたことであるが、片貝川や雨川を基準に考えると上小田切地区等は1段と見ることができる。このように、この平坦地形形成については千曲川による侵食だけでなく、支流の片貝川、雨川の影響も大きく受けているといえる。

平坦部の地質について考えると、構成物質の多くは砂礫層である。部分的に含まれる礫の量や礫の大きさによって層状をなしている。この層について広範囲に追跡調査ができるほどではないが、ほぼ水平層であること、地層として観察できるほどの淘汰がないことから単に河床礫の堆積というより砂礫の水中堆積と考えた方がよいと思われる。礫の大きさでは、その多くは1m未満であるが、臼田町下越地区と三条地区の間には径が3mを越す巨礫も観察することができる。砂礫層の堆積層の厚さは臼田町周辺では測定できないが佐久町宿岩周辺の千曲川河床では八千穂層群の露頭が見られることから、平坦部の砂礫層は臼田町周辺でも50m以内の厚さと予想することができる。また、佐久町宿岩地区における八千穂層群との接觸部の観察から平坦部の砂礫層が八千穂層群に不整合に重なっていることがわかる。このことから平坦部の砂礫層は八千穂層群の上位層となっている砂礫を主体としている南佐久層群と考えることも可能と思われる。

4 崖錐地形

佐久盆地の西側に見られる八千穂層群からなる高層位段丘崖の下には断続的に小高い地形が点在している。この中には臼田町横山地区や佐久市大沢地区などは段丘崖を横切るように流れている片貝川や大沢川による扇状地も含まれている。

小規模の扇状地と崖錐は地形からは識別しにくいこともあるが、形成条件や過程が異なることから、構成物質や堆積状況は大きく異なっている。扇状地は河川の流水の営力によって堆積するため、堆積物の多くは砂礫で構成され、淘汰もよく扇状地の場所によって礫の大きさ、量

は一定となっている。これに対し、崖錐は崖くずれによって作られる地形のため構成物質に定まった傾向は見られない。

医王寺横の遺跡では現在、墓地造成の工事を行っている。構成物質や堆積構造を示すような明瞭な露頭はみられないが、工事の過程で機械力によって地下を掘削しており、掘り出された土石を観察するかぎり扇状地と認める物は見られず、後背地の八千穂層群からなる段丘崖の崩壊によってできた崖錐地形と考えることができる。

遺跡が発掘された周辺の崖錐地形を詳しく観察すると、建造物等のために作った人工的な平坦箇所はあるものの、流水の力でできたと思われる平坦面は見られない。このことから医王寺付近の崖錐地形は千曲川、または片貝川が侵食によって低層位段丘を形成した後にできたと思われる。およそ、数万年未満の地史としては最も新しい出来事であると思われる。

(伴野 拓也)

第2節 考古学的環境

七曲り下遺跡は、蓼科山火山の裾野地形臼田山麓の片貝川左岸に位置し、段丘崖上には医王寺城が所在している。この医王寺城の崖下に細長い緩傾斜面が南北に続いており、前方は東側の田口地区の山麓まで千曲川の侵食による広大な佐久盆地が展開している。

地区別に遺跡の分布を概観すると、先ず、本調査区の七曲り下遺跡周辺は、3・4が下ノ城・寺久保遺跡で、医王寺城尾根上の南西側に遺跡が広がっている。両遺跡共に陽当たりの良い斜面に位置し、縄文時代から奈良・平安時代までの連続した時代の遺物が採集されている。4の寺久保遺跡はその字名のように、かつて寺が5寺あったと伝えられている。臼田に現存する相澤寺、医王寺の西南側に所在する薬師堂、その他、正明寺・根龍寺・地獄見堂などと称した寺があったとされている。（大正八年刊行『南佐久郡志』）南面した日当りの良い山麓は、耕作されていない畑が多く荒れているが、平坦面も多く寺跡であった可能性が強く感じられる地点が見られる。5の台ヶ坂遺跡は東端に旭ヶ丘団地がかかるが、西側の山麓は最近51の山神久保遺跡が新しく発見され、縄文・古～平安時代の遺物が採集された。

6・7は尾根に位置し、6の滝の沢古墳は臼田町の約半分が見下せる景色の良い地点に築かれている。前期古墳と考えられていたが、墳丘が高すぎるのでその可能性は少いとのご教示を県埋文センター佐久事務所の宇賀神調査研究員からいただいた。7の上ノ城跡と滝の沢経塚は



医王寺の場所は周囲より小高い
崖錐地形の上にある

古墳と同一の尾根に所在している。山の先端から佐久平が一望できるので烽火台として適地である。

佐久市との境には、8の荒谷遺跡、9の滝の沢入口遺跡が山麓に位置している。滝の沢の奥には50の新遺跡が発見され縄文～平安までの連続した遺物が採集された。10・11・13は平坦面の中に位置する遺跡であるため、弥生時代の遺物が採集されている。11の蛇塚遺跡は古墳が含まれ、昭和61年に実施された清掃調査では蕨手刀と直刀、鉄鎌が出土している。また、12の境塚古墳は佐久市と接した臼田自動車教習所の建物の裏にあり、奥壁の一部が露出している。

14の離山遺跡は、縄文時代から平安時代まで連続した遺跡で古墳3基を含む。南面した斜面から農道建設工事の時に銅釧3個、金環2個出土し早くから注目された遺跡である。

15～17までは、稲荷山周辺の遺跡で住宅地化されてしまった。18・19は三条の平坦地に所在する小さな遺跡である。

20～22は下小田切地区の遺跡群で弥生時代後期の集落はここが南限であると考えられる。標高720mを測る稻作限界地点に築かれた弥生の集落は、日本でも最高地点にあたるため、この地に稻作を開始した偉大なる私たちの祖先に敬愛の念を感じずにはいられない。昭和62年に勝間原遺跡の一部を調査し、弥生時代後期の住居址2軒を検出した。また、平成2年には丸山遺跡の一部を調査し、弥生時代後半の住居址4軒、奈良時代1軒、土坑墓6基を検出した。さらに、6.8m×4.6mを測る規模の掘立柱建物址を検出している。これは南佐久郡下において初見の遺構である。

23～26は、北川地区に分布する遺跡で主に縄文と平安時代の複合遺跡であるが、北川勝間遺跡は古墳時代が加わり、広沢遺跡は縄文～平安時代まで連続する遺跡である。

27～30・36は、扇状地と微高地に点在する小さな遺跡である。31は下小田切の家浦遺跡で縄文と古墳～平安時代の複合遺跡である。

32～40は、湯原地区に所在する遺跡で、32の滝遺跡は縄文時代の遺跡で、33・34は縄文・古墳～平安時代の複合遺跡である。35は中世の山城湯原城跡で連郭式で形が整っている。古くは湯原氏が拠った城であるといわれているが、武田氏侵入後はそれに属した相木系依田氏の居住となったものと思われる。33の和田遺跡の段丘上には、湯原神社第二の移転地である社地がありここから出土した鰐口に、「奉納湯原大門明神御宝前鰐口、弘治三月十二日吉日依田与七郎源長繁」と陰刻されている。また、37の上・中・下滝遺跡の字下滝にも初源の湯原神社があつたと伝承されている。湯原神社はここから鰐口の出土した和田に移転し、さらに、延宝九年（1681）現在地に移ったとの記録が残っているようである。この、上滝・中滝・下滝遺跡は最近表面採集をした結果、過去においては上滝地点から縄文早期・中期と平安時代の遺物が採集されているだけであったが、新たに中滝・下滝からも縄文土器、古墳～平安時代にかけての遺物が採集されて、遺跡の範囲が大きく拡大した。49も湯原地区の山麓に広がる遺跡で、石鎌や土師器、灰釉陶器が採集されている。



第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
1	七曲り下	臼田・七曲り下	山麓		○		○	○	平6年6月調査
2	医王寺城跡	"・下ノ城	山頂					○	
3	下ノ城	"・下ノ城	山腹	○			○		
4	寺久保	"・寺久保	山腹	○		○			
5	台ヶ坂	"・台ヶ坂	"	○		○	○		
6	滝の沢古墳	"・滝の沢	尾根			○			
7	上ノ城跡	"・"	"					○	滝の沢経塚含む
8	荒谷	"・荒谷	山麓	○			○		
9	滝の沢入口	"・水沼	"				○		
10	美里在家	"・美里在家	平地	○	○		○		
11	蛇塚	"・源吾庭	"	○	○	○	○		蛇塚古墳含む60年 清掃調査、蕨手刀出土
12	境塚古墳	"・善阿弥	"			○			
13	原田	"・原田	"			○			
14	離山	上中込・離山	台地	○	○	○	○		古墳3基含む
15	城下	臼田・城下	平地	○					
16	稻荷山城跡	勝間・城山	台地					○	
17	城山	臼田・城山	扇状地	○		○	○		
18	觀正田	三条・觀正田	平地				○	○	
19	南裏	"・浜茄子	"				○		
20	丸山	下小田切・勝間	扇状地	○	○	○	○		平2年一部調査
21	勝間原	"・"	"	○	○	○	○		昭62年一部調査
22	栗の木	"・栗ノ木	"	○		○	○		
23	北川勝間	北川・勝間	"			○	○		
24	千曲台団地	"・原	山麓	○			○		
25	田島窪	"・田島	"	○			○		
26	広沢	"・広沢	丘陵	○	○	○	○		
27	小山崎	臼田・小山崎	扇状地	○					
28	小山	"・小山	微高地	○		○	○		
29	日影	下小田切・日影	丘陵			○	○		

No.	遺跡名	所在地	立地	時代					備考
				縄	弥	古	平	中	
30	見次	下小田切・日影	丘陵			○	○		
31	家浦	"・家浦	扇状地	○		○	○		
32	滝	湯原・滝	山麓			○	○		
33	和田	"・和田	"	○		○	○		
34	北側	"・北川	"	○		○	○		
35	湯原城跡	"	丘陵					○	
36	横山	臼田・城下	扇状地	○	○	○	○		
37	上滝・中滝・下滝	湯原・上・中・下滝	山麓	○		○	○		
38	児玉・大平	"・児玉・大平	"				○		
39	ジンジロ	"・児玉	"				○		
40	中島	"・中島	"			○	○		
41	向城	中小田切・向城	"	○		○	○		
42	城影	"・城影	"	○		○	○		
43	雁峰城跡	"	丘陵					○	
44	札場吉原	"・吉原	扇状地	○		○	○		
45	向城跡	"	丘陵					○	
46	家浦	上小田切・家浦	平地	○			○		
47	堂裏	"・堂裏・西の入	山麓	○		○	○		
48	上小田切城跡	上小田切	山坂					○	
49	山の神	湯原・山の神	山麓	○			○		
50	滝の沢	臼田・滝の沢	"	○	○	○	○		平成6年12月新発見
51	山神久保	臼田・山神久保	"	○		○	○		"

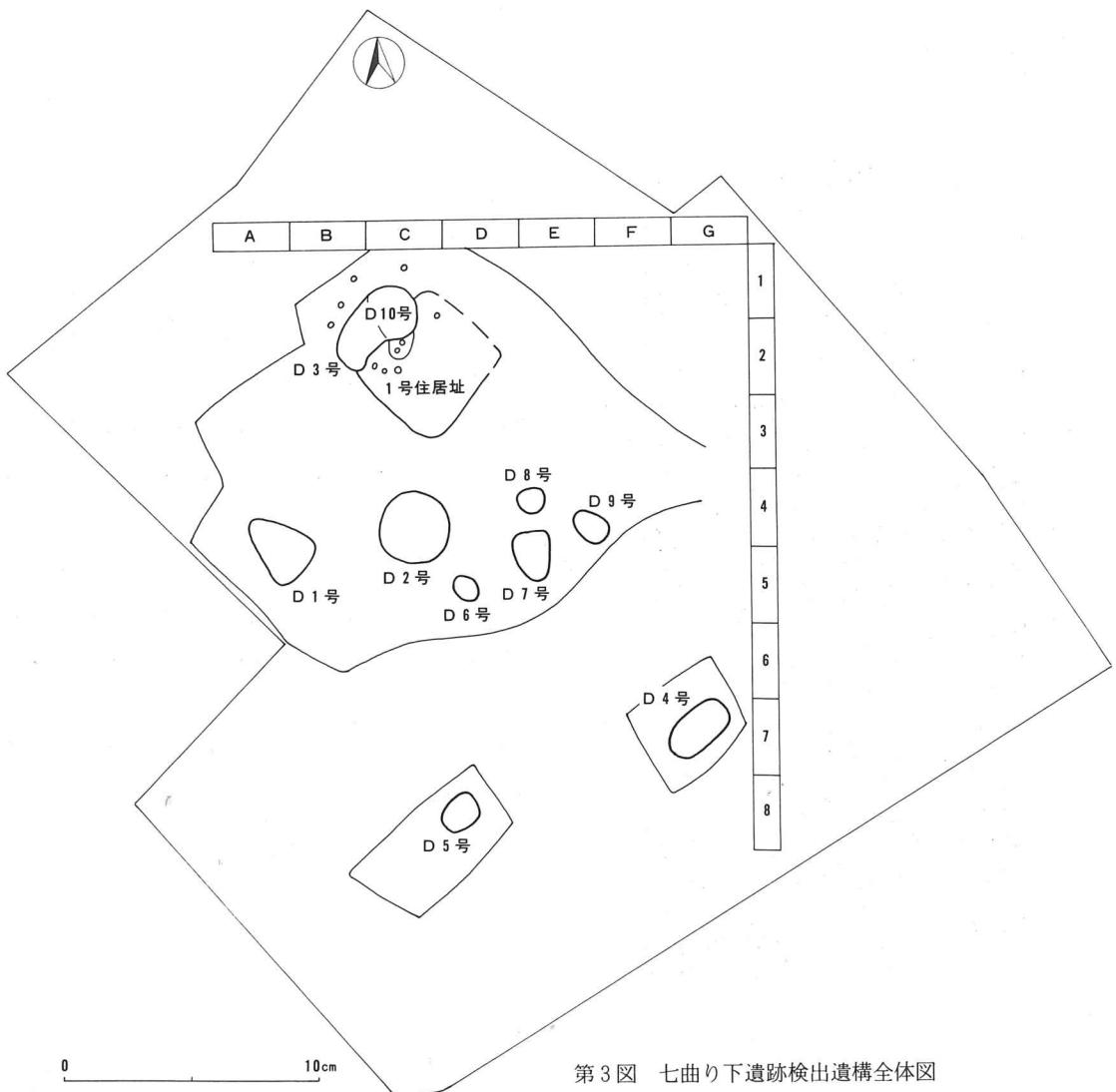
41～45は、中小田切地区の遺跡である。41の向城遺跡、42の城影遺跡、44の札場吉原遺跡は共に縄文、古墳～平安時代にかけての複合遺跡である。中小田切には、43の雁峰城跡と45の向城跡が水田地帯を隔て相对する山頂に所在している。雁峰城は、小田切氏が居城していたが水内郡に移ったため戦国時代に入ってから草間氏が城主となったので一名草間城とも呼ばれている。堀切り、帯曲輪、段郭と巧みな配置を示し、荒れてはいるものの現在もしっかりした遺残状態を示している。一方、向城跡は雁峰城攻略に際し武田信玄が築いたと伝えられている。北方の蓮華寺窟からは五輪塔、瀬戸・美濃系の骨壙が出土している。弘安二年（1279）に一遍上人が小田切のある武士の館に招かれて念佛し、一遍が先だって踊りはじめそれにつれて集った人々

も踊りだしたことが『一遍上人絵巻』に記されている。この武士の館がどこなのか分ってはいないが、中世骨壙の出土や付近の環境からみてこの近くであることも考えられる。

上小田切地区に入ると46の家浦遺跡があり、縄文と平安時代の遺物が採集できる。家浦と隣接して、縄文・古墳～平安時代の複合遺跡である47の堂裏遺跡が所在している。48は十二新田部落の北東尾根上に立置している単郭の上小田切城跡である。

また、周辺遺跡分布図では本調査区から北西側一帯は佐久市に入るが、遺跡分布のあり方を把握するための参考に、佐久市の遺跡分布を示した。

(島田 恵子)

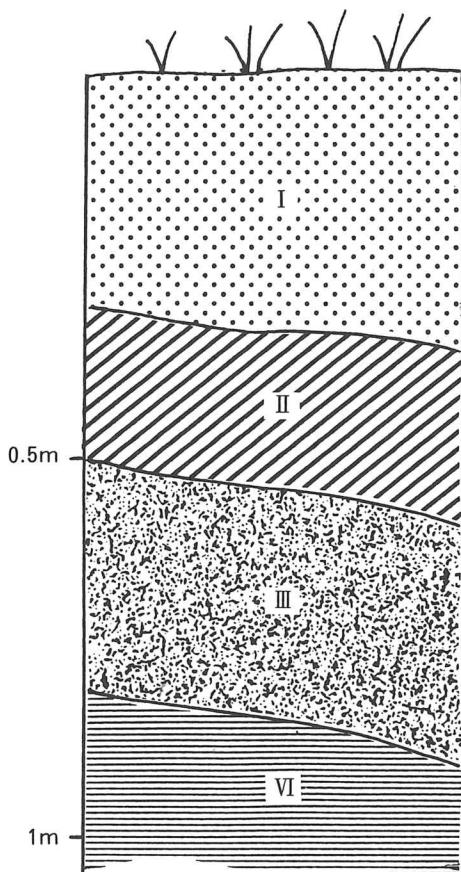


第3図 七曲り下遺跡検出遺構全体図

第3章 層序

七曲り下遺跡の地形は、段丘崖の崖下に細長い緩傾斜面が南北に続いている。これは、崖の崩れによってできた地形で「崖錐地形」といわれている。この地形は、佐久町から佐久市まで広がっており、各所で見られる露頭から「八千穂層群」として湖成層に分類されている。

本遺跡の背後の山は、医王寺城跡の所在する城山で中腹に岩穴があり、高位段丘の堆積構造の一部分を観察することができる。ここでは、岩に細い石が集まっている集塊岩の状態がみられる。これらの石が細く崩れているために遺跡周辺の畑の土は、1～2cm大の小石粒の混入が耕作土中にみられる。土は強粘土層である。この強粘土層に小石粒の混入したあまり変化のみられない土層が厚く堆積していた。



I層（褐色土） 耕作土 層厚30cm、1～2cm大小の小石粒、砂を多量混入する。

II層（黄褐色土） ローム地山層 粘性の強いローム層に1cm大小の小石粒を多量混入、パミス微量含む。この層を掘り込んで遺構を構築している。ところどころに砂の混入多い。

III層（黄褐色土） II層より粘性弱くなる。1cm大小の小石粒少量混入、植物破片もところどころ暗褐色土に変色して少量混入する。

VI層（明褐色土） 粘性中で1cm大小の小石粒少量含む。酸性の小石粒の灰色化が目立つ。

（島田 恵子）

第4図 七曲り下遺跡層序模式図

第4章 遺構と遺物

1 住居址

1) 1号住居址

遺構(第5図)

1号住居址は、調査区中央の北端に検出され、グリッドはB～D—1～3に位置している。西壁を切ってD3号・D10号が重複した状態で入り込み複雑な様相を呈していた。

プラン確認は、地形が北東側に傾斜している関係から南壁と東壁の一部分が把握できたのみであり、西壁側の土坑の重複があったために非常に困難であった。そのため、トレントによる試掘から住居址の存在を確認するに至った。

平面プランは、一辺4.6mを測り隅丸方形を呈するとおもわれるが、東南側の輪郭が削りとられてはっきりしないため推定である。主軸方位は、N-40°-Wを示している。これは地形に合せた状態で住居の位置を定めているからである。

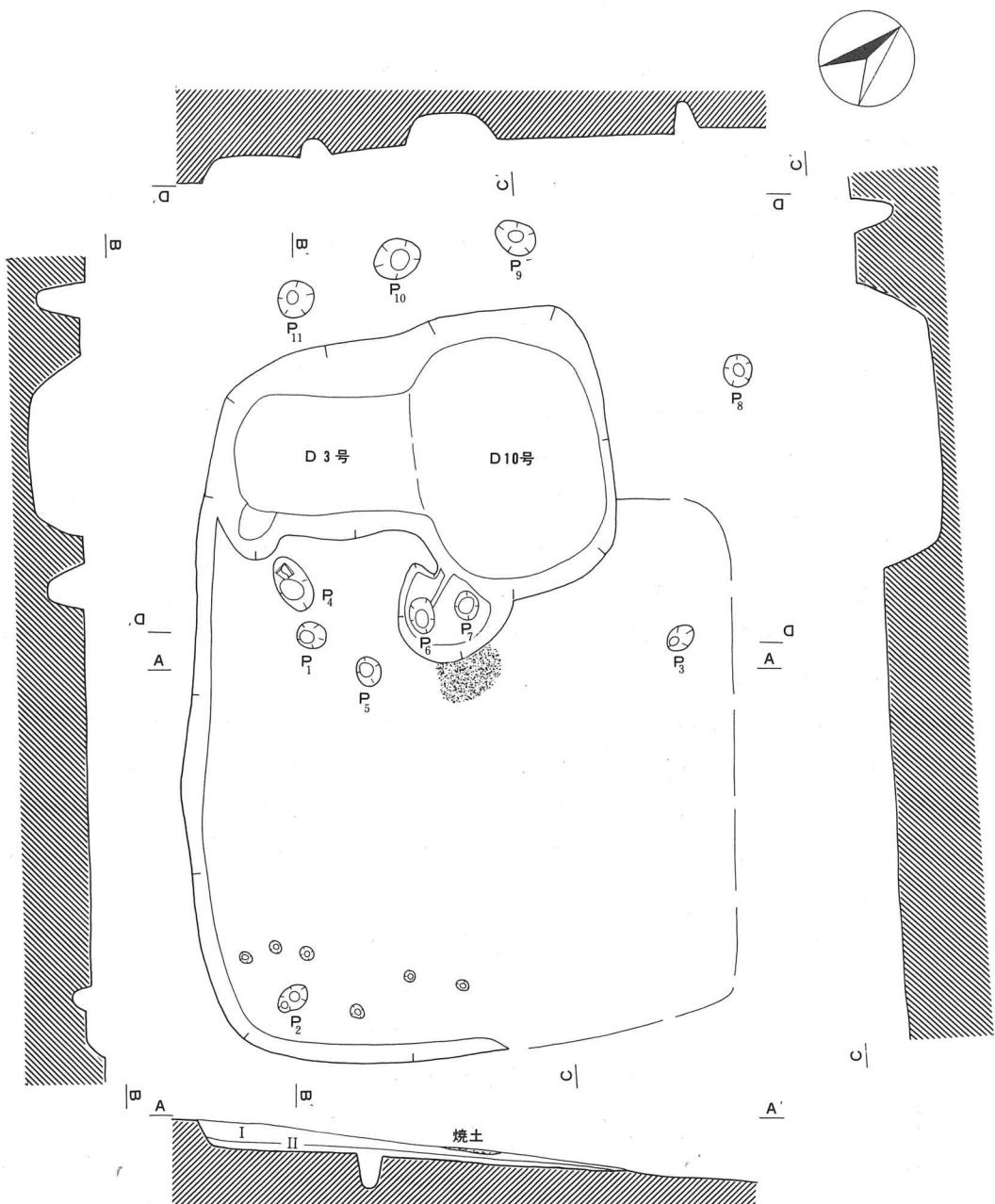
壁高は、遺存状態の良かった西壁側が20cmで傾斜して立ち上っている。南壁側は16cmを測り遺存状態はやや劣る。

覆土は、褐色土を基調とした2層に分かれ、I層は暗褐色土で粘性が強く5mm～2cm大の砂礫を多量混入する。II層は褐色土で砂礫の混入がさらに多くみられた。

床面は、やや堅緻な様相が伺えるものの砂礫の混入が多いため、さほどの堅さはみられない。また、住居址の中央から東側にかけては地形的な傾斜による関係から、耕作によって10～20cm程度削り取られて低くなり、床面は完全に消滅している。

柱穴は、住居内に計7個検出されているが、住居址に伴なう柱穴と土坑に關係した柱穴とに分れる。位置的な關係からP₁～P₃が住居址に伴なうと考えられるが、いずれも貧弱でP₁が深さ14cm、P₂が17cm、P₃が20cmを測る。直径はそれぞれ20cm前後である。この他南西壁コーナー附近に径10cm、深さ10cm前後の小さな穴が認められるが用途は不明である。P₄は径50×30cm、深さ27cmを測り、ピット内の壁上に第6図1に示した土鍋の口縁部が出土した。しっかりした掘り込みでありP₁の際であるため配例を考慮すると、P₁がP₄を支えた支柱であることも考えられるが、住居址全体の柱穴が剝出されていないため、P₁～P₇までの柱穴は住居址に伴なうものであるか断定はできない。

また、北壁付近の中央に位置して、径90cm、深さ30cmを測る不整な円形を呈した土坑が存在している。土坑内には直径20cm前後、深さ15cmと20cmを測る柱穴状の穴が2個ある。特にP₇は砂が充満しており水が入りこんだ様相がみられた。土坑は、住居址に関連したものであったが土坑に伴なう柱穴を掘った時に内部は壊されたと考えられる。



I層（暗褐色土）粘性の強い土層に5mm～2cm大の小石、砂を多量混入
II層（褐色土）I層より小石、砂の混入がさらに多量となる。

0 (1 : 60) 2m

第5図 1号住居址実測図

さらに、土坑の際に焼土が35cm×50cm、厚さ5cmの範囲にわたって堆積していた。石組や掘り込んだ様子は全くみられない。むしろ床面からやや浮いた状態に焼土が堆積している。D3号土坑・D10号土坑構築時に関係した焼土なのか、判断に苦しむ状態の堆積である。

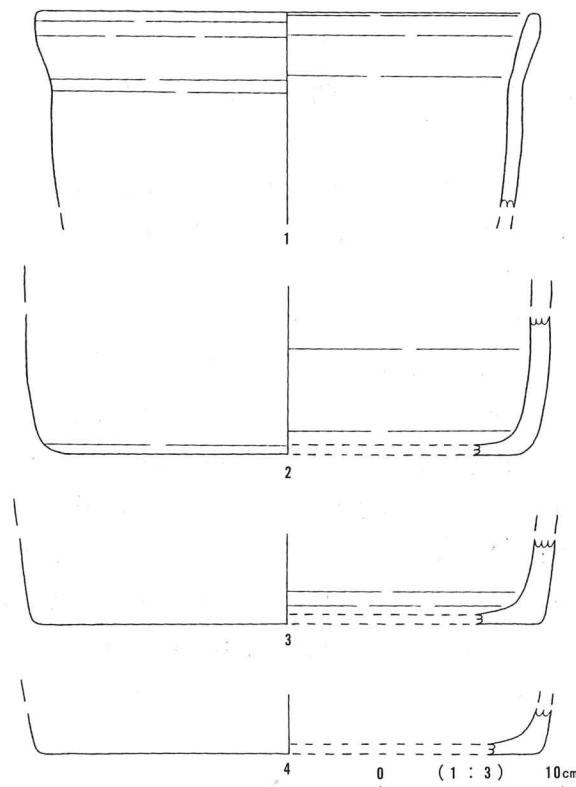
以上が住居址の状況であるが、傾斜面のために住居址の半分が削り取られていることと、土坑の重複により全容の把握が不可能であったため不明な点が多い。

遺物（第6～8図）

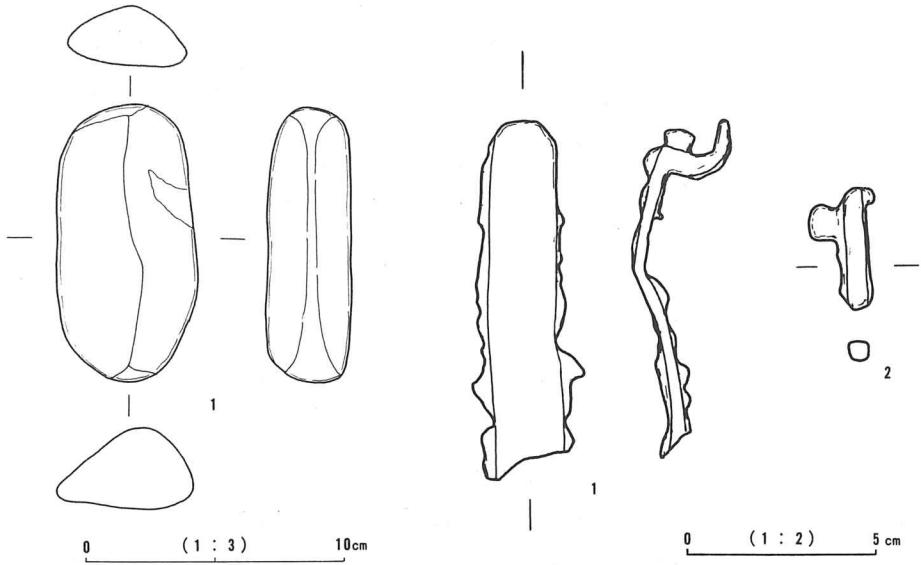
本住居址から出土した遺物は、土器片25点、石器1点、鉄器2点と骨が出土している。土器片は全て中世の内耳土器、土師質土器の皿である。この内、4点が実測可能となった。

No.1は、内耳土器口縁部で口径28cmを測り、器形は口縁部でやや開く。調整は口縁部にロクロ痕が顕著に残り、胴部はナデが目立つ。また、口縁部内側に稜を残している。焼成固い。

No.2～4は、胴下部～底部にかけての破片である。それぞれ胴部の器厚に比較すると底部が極端に薄くなる。No.3の胴部の器厚はかなり厚い。底径は、複原実測のために推定にとどまるを得ないが、26～28cmに落着くものとおもわれる。



第6図 1号住居址出土土器実測図



第7図 1号住居址出土石器実測図

第8図 1号住居址出土鉄器実測図

第7図No.1の石器は、断面三角形を呈した石で全体がスベスベしている。上端部には敲打痕の痕跡も認められる。青灰色を呈した安山岩で千曲川原から集めてきたと考えられる。手の中に握れる大きさである。

第8図1・2は鉄器である。No.1は、長さ9cm、幅2cmで上先端部が1cmの幅で横に曲げられさらに上部へ0.8cm伸びたところで終っている。下端部は折れている状態が認められる。No.2は断面四角形を呈した破片で釘状のものである。右の出っ張りは腐蝕と小石がしっかり密着しているように見受けられる。No.1・2共に器種は不明である。

骨は、図版4に示した。長さ10cm最大径3.5cmを測る胫骨状の骨と骨頭などが出土している。人間の骨が動物の骨であるか比較検討した結果、のっぺらぼうな部分が人間の骨と異なる。

これらの遺物は全て床面直上において出土した。床面の遺存していた西壁から2.6mを測る幅の内側左右全面に散布していたものである。従ってこの部分の床は耕作によって削り取られることはなく廃絶当時のままであったと考えられる。また、この床面に共なって考えなければならないのは、上屋構造の問題である。遺物出土のこの状況から平地式住居とは考えにくい。少し土を掘り込んでいることから堅穴式住居址であると考えられる。しかし、柱穴もきちんとした状態でないことから尚検討を要する。

(島田 恵子)

2 土 坑

1) D 1号土坑（第9図）

本土坑は、調査区中央の西端に検出され、A・B-4・5グリッド内に位置している。プラン確認面は不整な形状であったが容易に把握することができた。

平面プランは、長径2.9m、短径1.5m～2.4mを測るが、主体部は、東西2.4m、南北側1.8mを測る長楕円形を呈した部分にあたるとおもわれる。北側に突き出た三角形状の部分は付属的な施設であるが、後世の攪乱であるか判断に苦しむが後者の可能性が強い。

覆土は、主体部が2層に分れ、I層は、暗褐色を呈し粘性の強い土層中に小石粒と砂を多量混入している。II層は黒褐色土でI層と同様、小石、砂を多量混入するがその中に炭化粒子が多量含まれる。付属施設的な出張り状の遺構覆土は、褐色土を基調とした2層に覆われ、II層は砂を多量混入し、III層は砂が充填した層であった。底面は、西側から東側に向って傾斜している関係から地形のままに掘り込まれている東西側と、主体部と突き出し部分のある南北側は、突き出し部分がやや複雑に掘り込まれている。

壁は、北東側の深い部分が急傾斜で立ち上るが、西南側は浅いのでなだらかな立ち上りとなっている。底面は、ほぼ平坦であるが地形的な関係から東側に傾斜している。また、北側出張りの部分はかなり複雑な様相であることと、落込み中央～東側にかけての卵形の穴の覆土が砂層であることから、水が溜っていた可能性が考えられる。

また、底面からやや浮いた状態に、長さ15～25cm、幅3～7cmを測る炭化材と、西壁際には15×30cmの範囲に焼土が散布していた。焼土中には炭化材も混入していて、火を燃やした痕跡が認められる。炭化材は栗とナラの木であるとおもわれる。

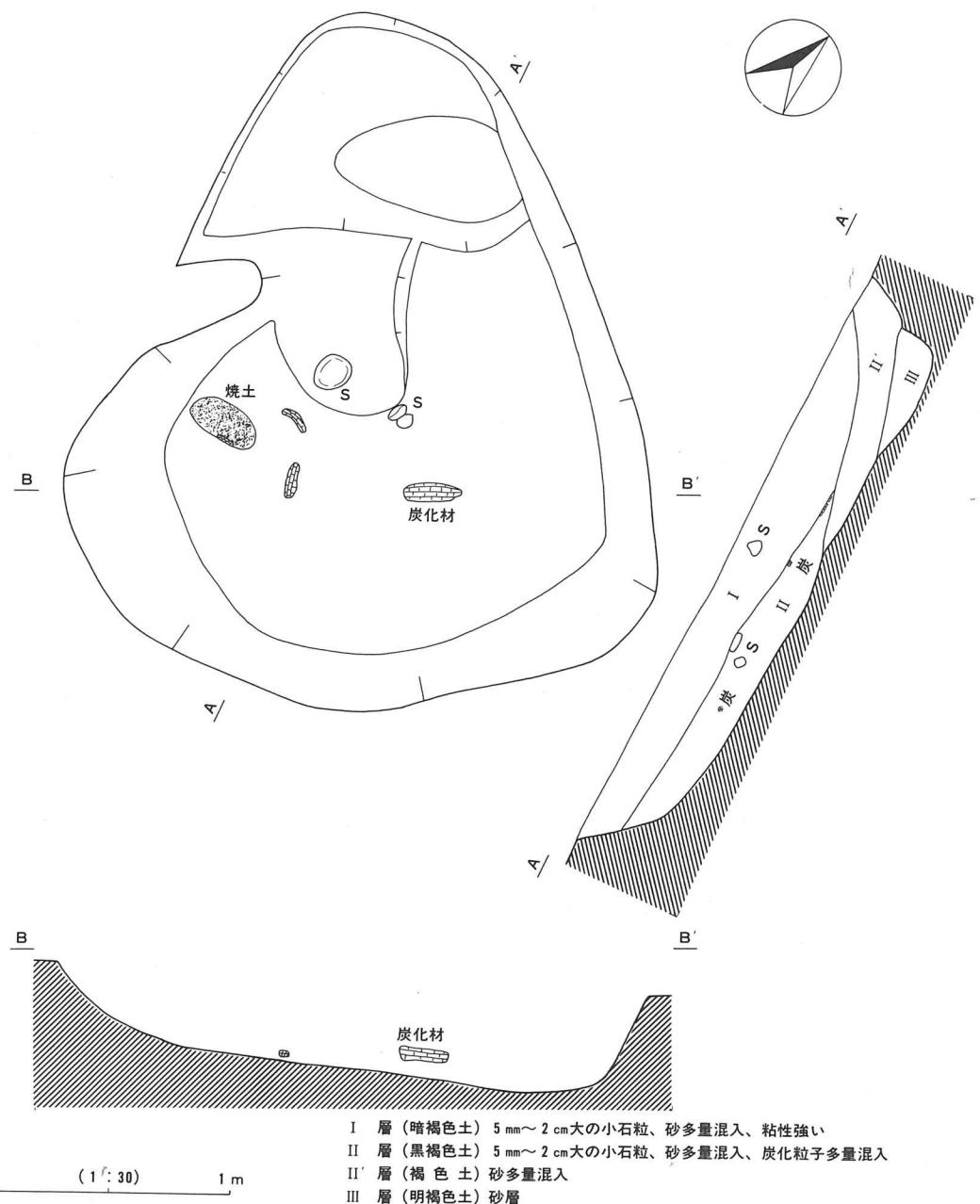
遺物は、両耳土器破片が13点出土している。口縁部3点、底部1点、頸部1点、残りは胴部片である。第26図1に口縁部片の実測図を示したが、口縁部はやや内湾しながら直立気味に立ち上る器形である。2点は同個体であるが、他1点は別個体である。また、頸部片は「く」の字状に屈曲して外反する口縁部であるとおもわれるが口縁端部が欠失する。2の底部片は底部中央の器厚が薄く0.6cmである。共に焼成固い。

2) D 2号土坑（第10～13図）

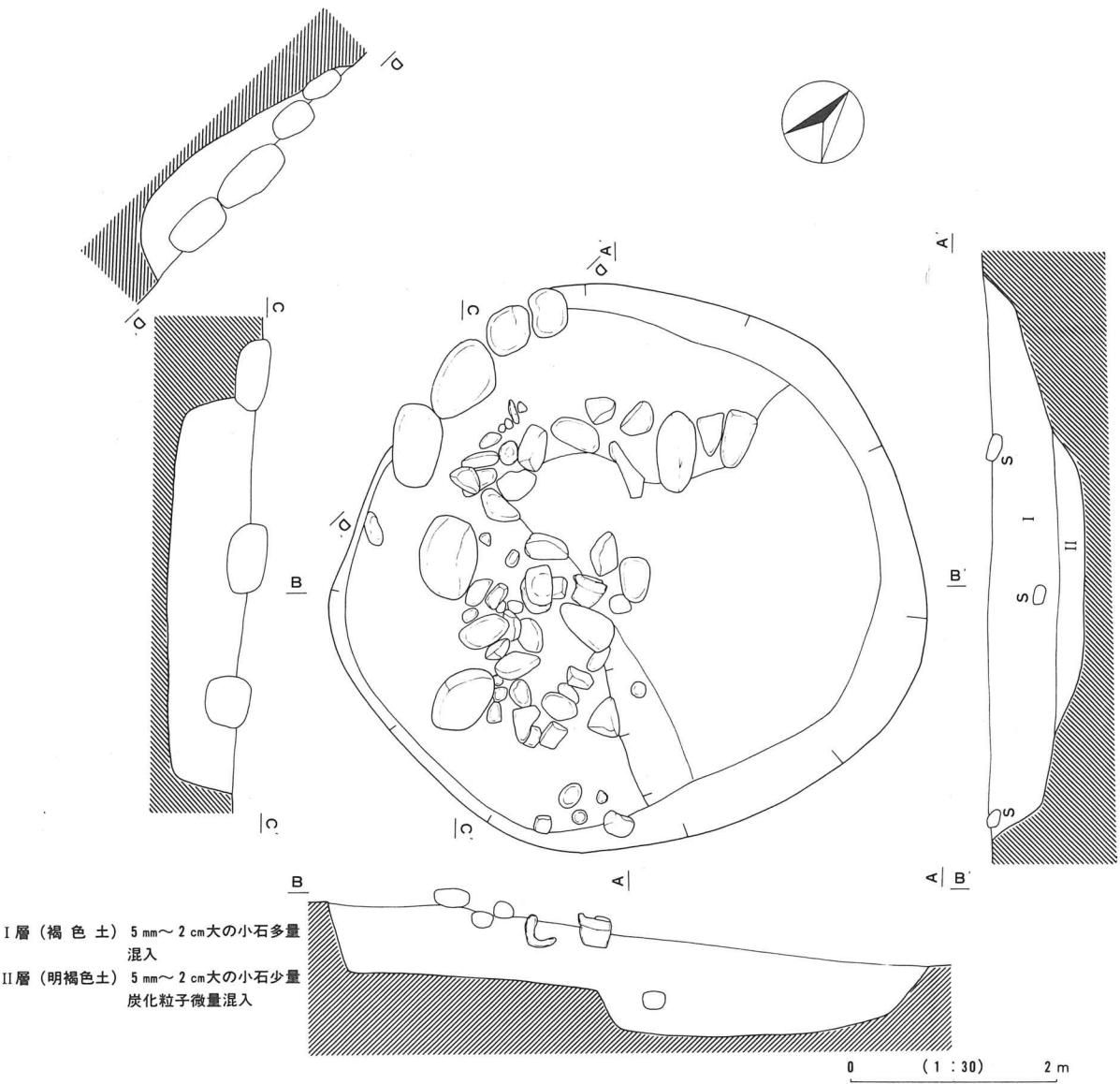
D 2号土坑は、本調査区のほぼ中央に位置している。グリッドはC・D-4・5内にあたる。西方にD 1号土坑、東側にD 6号～D 9号土坑までが隣接している。

プラン確認は、あまり判然としない色調であり当初の輪郭より掘り下げていくに従って大形化していることが分った。また、北西側には20～40cm大の河原石が4個並んでいたため、遺構の性格がつかめなかつたのでプラン確認に迷いが生じた。

平面プランは、直径2.8mを測りほぼ円形を呈する。覆土は、褐色土を基調とした2層に分



第9図 D 1号土坑実測図



第10図 D 2号坑実測図

れ、I層が粘性の強い褐色土で底面付近までこの土層に覆われており、0.5～2cm大の小石粒を多量混入している。II層はやや明るい褐色土で炭化粒子を微量含む。主軸方位はN-37°-Wを示す。

本土坑は、東側に礫の配石が空白であるほかは大小の礫が上面に配石されている。また、プラン確認時より顔を出していた河原石は、壁立ち上り際に配石されていることが分った。遺構の目印としての役目を果している配石となろう。配石は、大きいもので25×40cm大が2個、20

× 40cm大 2 個、15× 30
cm大 2 個、15× 20~25
cm大 17 個その他 10× 15
cm大、10cm大とかなり
大きな石が多く、安山
岩が主体を占めている。

配石されている部分
は、されていない部分
と比べて深さに30cm程
の違いがみられる。さ
れていない部分が深く
なるためここに埋葬し
た可能性が考えられる。

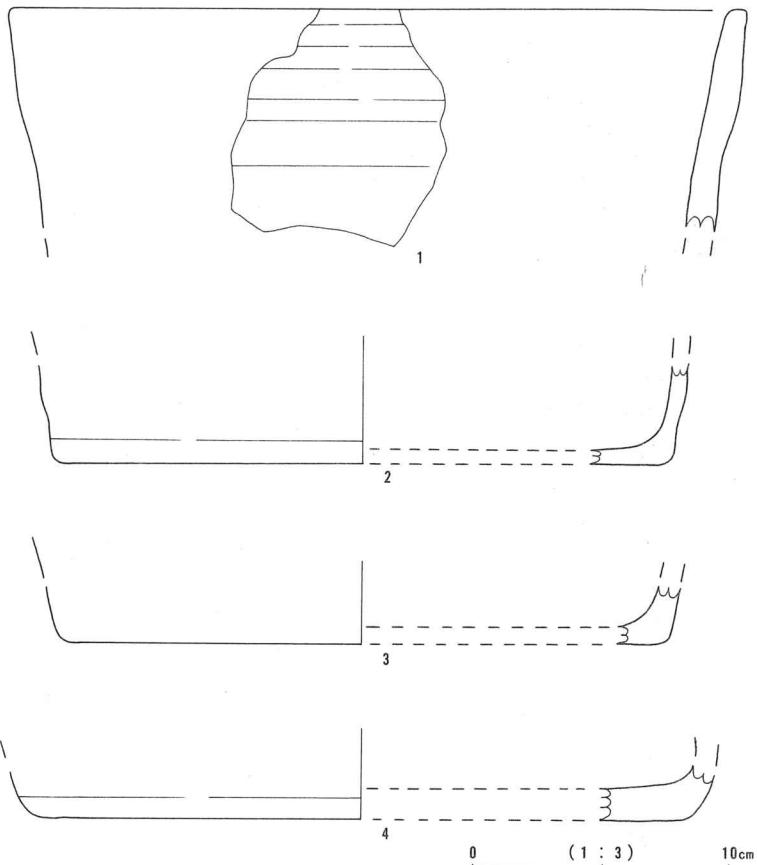
壁は、西側が垂直に
立ち上るが、東壁はな
だらかである。また、
配石による底面の段差
は、南壁中央に向った
部分が最も顕著で壁立
ち上り部分は特に堅か
った。

出土遺物は、土器、石器、鉄器が出土している。第11図に出土土器実測図を示した。土器片
は、内耳土器口縁部 4 点、底部 5 点、頸部 1 点、胴部 8 点、内耳端部 1 点、その他甕破片 5 点
がある。その内の 4 点を図示した。

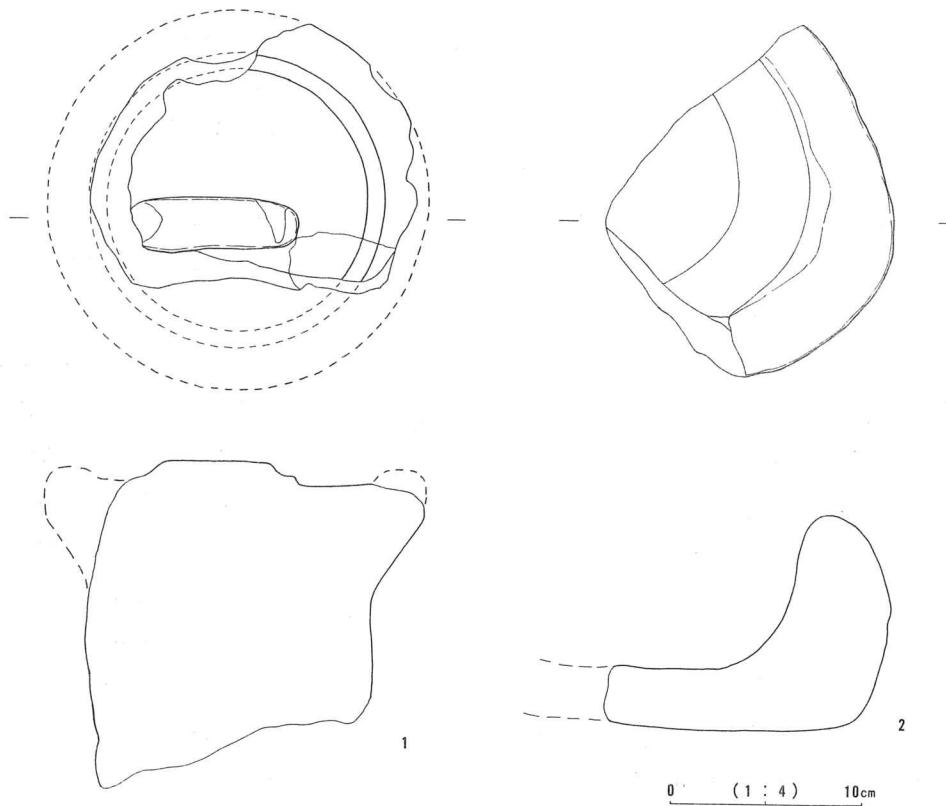
第11図 I は、口縁部が直立して立ち上る。2~4 の底部片は、2 の器厚が最も薄く、4 はか
なり厚く頑丈であり、肥土中に雲母と砂を多量混入している。いずれも焼成は堅い。

内耳端部片は、やや屈曲して立ち上る頸部際の内側に耳が途切れた部分がみられる。本遺跡
出土の内耳土器では唯一の内耳部分の土器片である。また、「く」の字状に屈曲して外反する
部分を示す細片 1 点もみられる。

石器は多種多様のものが出土している。先ず、第12図 1 は配石の中に入っていたもので、土
坑内の中央に並んでいた。直径 20cm を測り、石臼のように上縁があり凹み面から緩やかに立ち
上っている。凹み面はほぼ平坦であるが中央から幅 2.5 cm、現存の長さ 8.5 cm の細長い凸みが
付いている。平坦な凹み面を作り出す時にすでにこの部分を残しながら凹み面を形作っている。



第11図 D2号土坑出土土器実測図 (1 : 3)



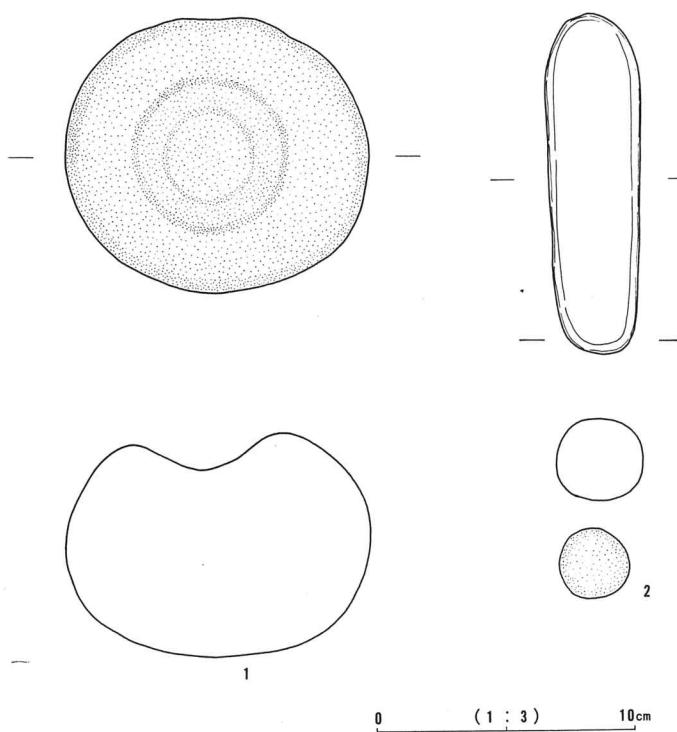
第12図 D 2号土坑出土石器実測図

下端が割れていることから全体の形がどうなっているか分らないが、あまりこの例はみられない。臼の種類の中にも出ていない形態である。凹み面に黒い斑点が付着していることから、石臼ではない用途があったとも考えられる。石質は集塊岩の要素をもった溶岩である。

2は、搗き臼の破片である。直径26cm前後で、高さ11.5cm、深さ8.5cmを測る。底部は内、外表面共に平底で、内面には磨擦痕が認められ側面には朱色のものが付着している。外面脛部は緩やかな丸味をおびている。石質は集塊岩である。1と並んだ状態で出土した。

1、2共に意図的に割ってから土坑内に配石したと考えられる。それは、1の石臼状の石器が叩き割ったとおもわれる割れ方で、自然な割れ方を呈していない。2の搗き臼は比較的きれいに割られている。

第13図1は土坑上面から出土した中心に凹みをもつ石器である。形の良い砂岩の自然石を選んでいるため少し座りが悪い。中心に直径6cm、深さ1.2cmの円形の凹みが設けられ底面は磨擦痕が残っている。2は、長さ13.4cm、径3.5cmを測る敲石で、両先端は敲打痕が残り手で



第13図 D 2号土坑上面出土石器実測図 (1 : 3)

握りしめた部分はスペスベしている。この敲石を使つて、凹石にのせた堅果類などを敲き割ったと考えられ、1・2はセットになる。2は砂岩である。

この他、第25図2に示してあるのが覆土中から出土した砥石である。長さ7cm最大幅2.5cmで、4面共に擦られているが、特に内側は磨減りが左右とでは大きな差が生じている。左側のみかなり磨減りしている。

第27図1は配石の中に混入していた軽量の石で、全体に黒光りしており塗彩された感じがする。ところどころに朱色が付着している。

石質は凝灰質安山岩である。

第24図1は、長さ4cmを測る楔である。鋸が付着しているが完形品である。上部は幅1.2cmの四角形で、下端 0.3×0.6 cmの長方形の形状を呈している。

以上が本土坑から出土した遺物である。土坑の位置・大きさ・配石のあり方と共に以上のような遺物の多様性から、本土坑は特別な意味をもつ中心的な存在の遺構であるとおもわれる。

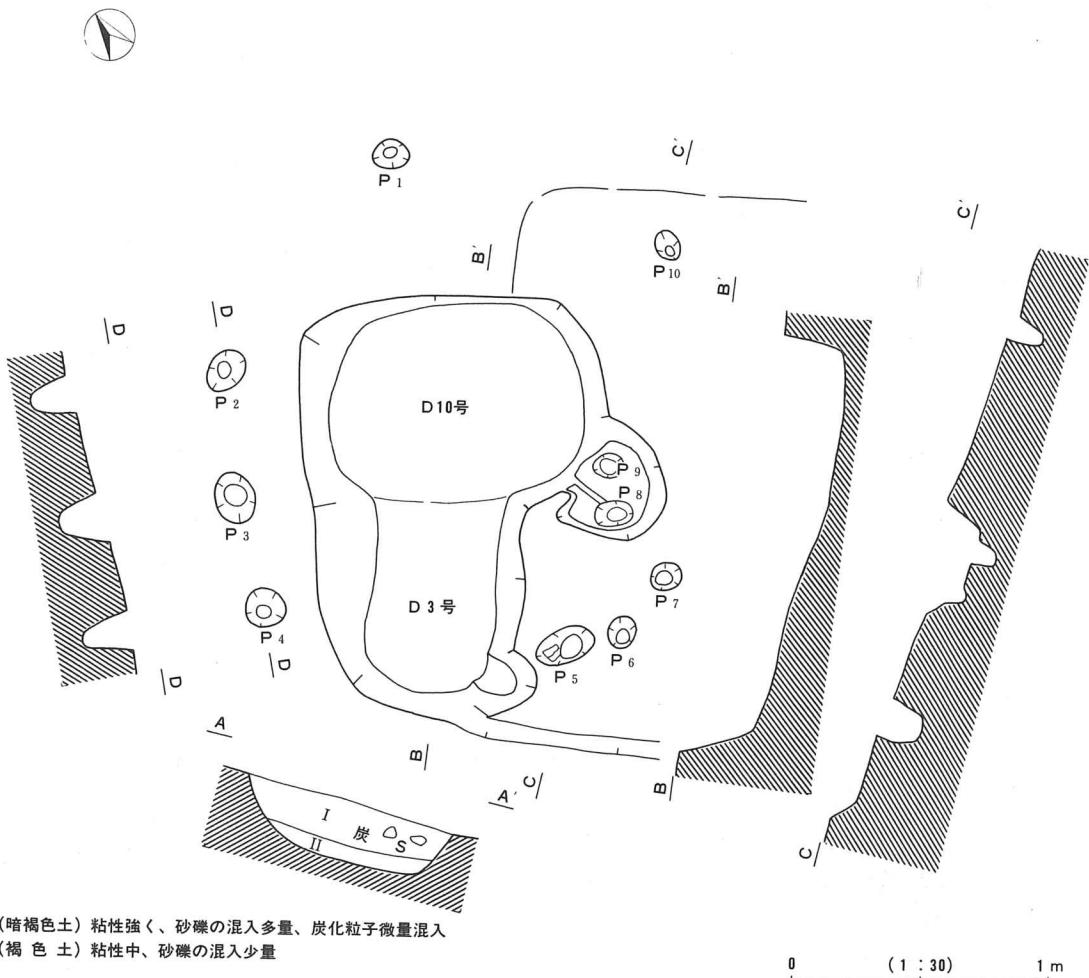
(島田 恵子)

3) D 3号土坑 (第14・26・27図)

本土坑は、H 1号住居址の北西側に一部住居址と重複して検出された。グリッドは、B・C-1・2内に位置している。また、この土坑の東側を切ってD10号土坑が構築されている。

プラン確認当初、この重複関係は三重に重なっていたため新旧を見分けることはもちろん、プランも把握できない状況であったため、トレンチ掘りによって掘り下げを開始したが、重複関係をしっかりつかむには、最終的には底面まで掘り下げてからということになってしまった。

平面プランは、短径0.8m、長径はD10号に切られていたため推定であるが、1.2m前後で



第14図 D 3号・D10号土坑実測図 (1 : 30)

あるとおもわれ、南北に長い長方形を呈するが南西コーナー側がやや出張る。

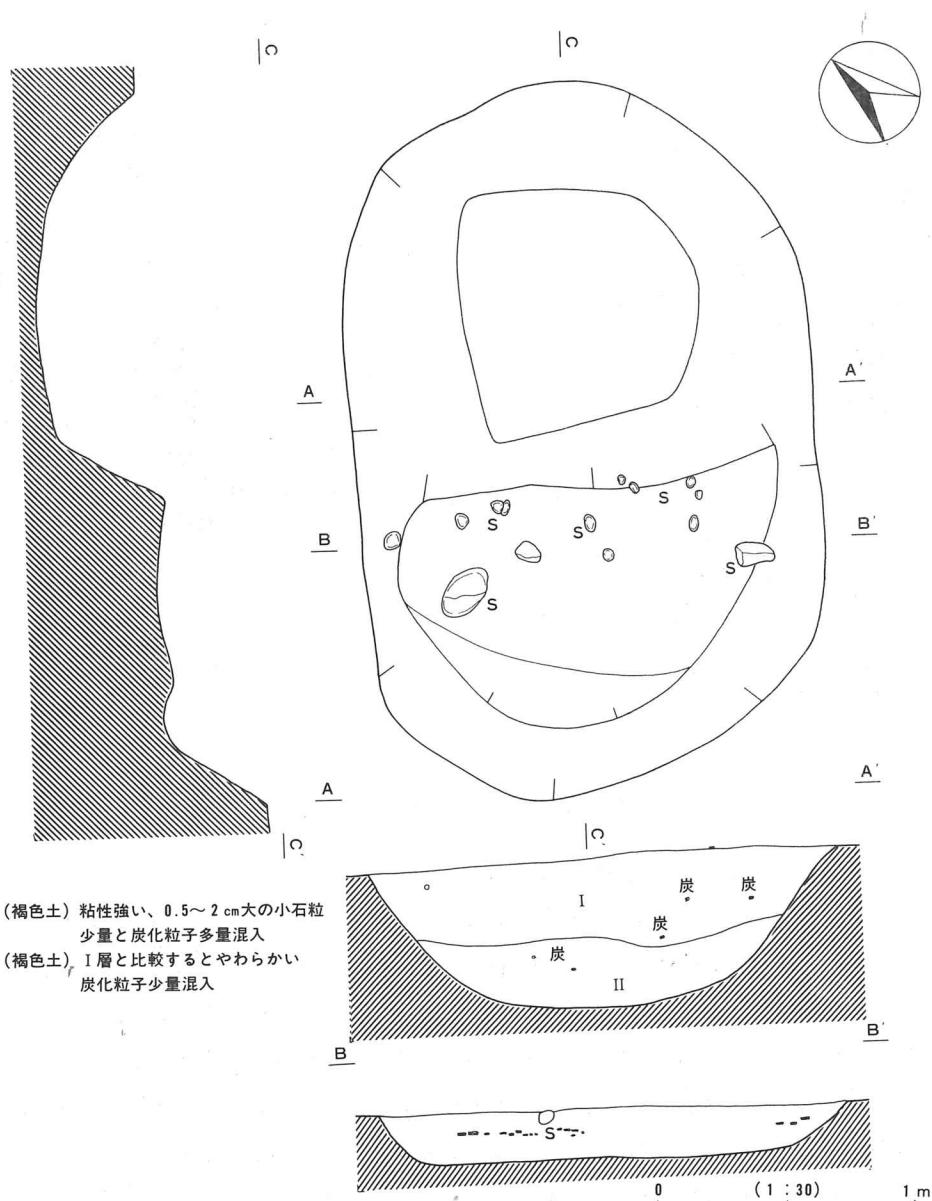
覆土は2層に分れ、I層は暗褐色を呈し砂礫の混入が多量で炭化粒子を微量混入している粘性の強い土層である。II層は褐色土でやや粘性が弱まるが砂礫の混入が少量認められた。

深さは50cmを測り、壁は急傾斜をもって立ち上っている。底面は、地形的関係から北東側に傾斜しながら平坦に掘り込まれている。南西側コーナーの出張りは、直径20cm、深さ30cmで立ち上り際の住居址柱穴から頭の骨とおもわれる平な骨が出土している。（図版4—5）この出張りは覆土が明るい褐色土であるため、土坑に伴なわない後日の搅乱とおもわれる。

また、土坑の西側には径15~20cm×15cmの柱穴が3個（P₂、P₃、P₄）、北東側に2個（P₁、P₁₀）、南東側に2個（P₅、P₉）巡っている。この柱穴は、H 1号住居址のものではなく二つの

土坑をとり巻く柱穴と考えられる。長軸方向はN—40°—Eを示す。

土器は、内耳土器口縁部2点、弱い屈曲の頸部片2点、胴部4点、底部1点、その他細片1点がある。第26図3に口縁部1点を図示した。直立氣味に立ち上る口縁部で、口径は27.5cmを測ると推定される。内・外面共に黒色を呈す。いずれも土器はロクロ痕が顯著で焼成固い。



第15図 D 4号土坑実測図 (1 : 30)

石器は第27図2が出土している。下端の一部を欠くが長さ13.5cm、最大幅6.5cmを測り敲石とおもわれる。両先端に敲打痕があり、正面の形状はきれいに整っている。重量がある安山岩を素材としている。

第28図2の拓影に示した古銭、天禧通宝が1点出土している。北宋1018年発行であるがうすいため鋳写しによるビタ銭であるとおもわれる。

遺物のほとんどは土坑の上部から出土している。土坑墓の埋葬品と考えられる。

(佐々木 春蔵)

4) D 4号土坑(第15・26・27図)

本土坑は、調査区南東側のG—7グリッド内に検出された。トレンチによる試掘調査によって確認された土坑で、最東端に位置している。

平面プランは、長径を測る南北側が280cm、短径の東西側が180cmで長方形を呈する。

覆土は2層に分れている。I・II層共に褐色土であったが、II層の方がいくらかやわらかい土層であったため区分することができた。0.5~2cm大の小石粒を少量と炭化粒子を含んだ粘性の弱い土層である。

本土坑は、北東側と西南側とでは掘り込み状態が異なる。北東側は最深部が60cmで、壁はゆるやかな傾斜をもって立ち上っている。1.6m×1.8mの規模の掘り込みで、底面は0.9mの方形を呈している。長軸方向はN—46°—Eを示す。

西南側は、深さ25cmで10~15cm掘り下げた部分から2~5cm大の炭化材が多量に出土し、底面には大小さまざまの礫が散在していた。西南コーナー寄りの礫が比較的大きく、14×25cmの細長い凝灰岩で、他はこぶし大の石である。これらの石の中には、片貝川水系ではみられない硬質な石で、黒色・茶褐色・赤褐色の磨かれたような礫も混入していた。

また、炭化材は西南側の大きな石と東側の大きな石との間に多く認められた。西南コーナー寄りの石は、表面が赤く焼けていて石に亀裂が入っており熱を受けている。炭化材の出土からここで火を焚いたことが推定できる。

遺物は、内耳土器口縁部片2点、胴部1点、底部1点の計4点が出土し、第26図4に底部を図示した。底径22cmであるとおもわれるが細片なのではっきりしない。また、第27図4に図示した石は全体にうすく赤味がかっていてところどころに揚子の先でついたような小さい穴が認められる。さらに、土坑中央の西側に第28図6に拓影で示した古銭永樂通宝が出土している。永樂通宝は明の永樂六年(1408)に発行され、銭の中では最も良銭であったため銭の基準とされた。本土坑出土の古銭は文字の判読はできるが、土の付着で汚い。

本土坑は、最深部60cmを測る北東側が埋葬に関連した施設で、炭化材の散布と礫の配石された南西側が埋葬に共なった儀礼の場であると考えられる。遺物はこの施設にのみ出土していることからもその可能性は高い。

(油井 秀雄)

5) D 5号土坑 (第16~18図)

本土坑もD 4号土坑と同様、トレーナによる試掘調査によって確認された。調査区中央の南端D-8グリッド内に位置している。

平面プランは、長径170cm、短径140cmを測り、南壁側がやや丸味を帯びた方形を呈する。

覆土は、褐色土を基調とした2層により形成され、地山層とあまり変化のない色調であったためプラン確認には時間を要した。I層は暗褐色土で、0.5cmから1~2cm大の小石粒が混入した粘性の強い土層である。II層は、褐色土で2cm大の小石が混入し、I層より粘性が強い土層となる。長軸方向は、N-48°-Eを示す。

底面は、北壁側が幅40cmにわたって5~18cm程高くなっているがその他は平坦であった。深さは40cmで、壁は急傾斜をもって立ち上っている。

出土遺物は、土師質土

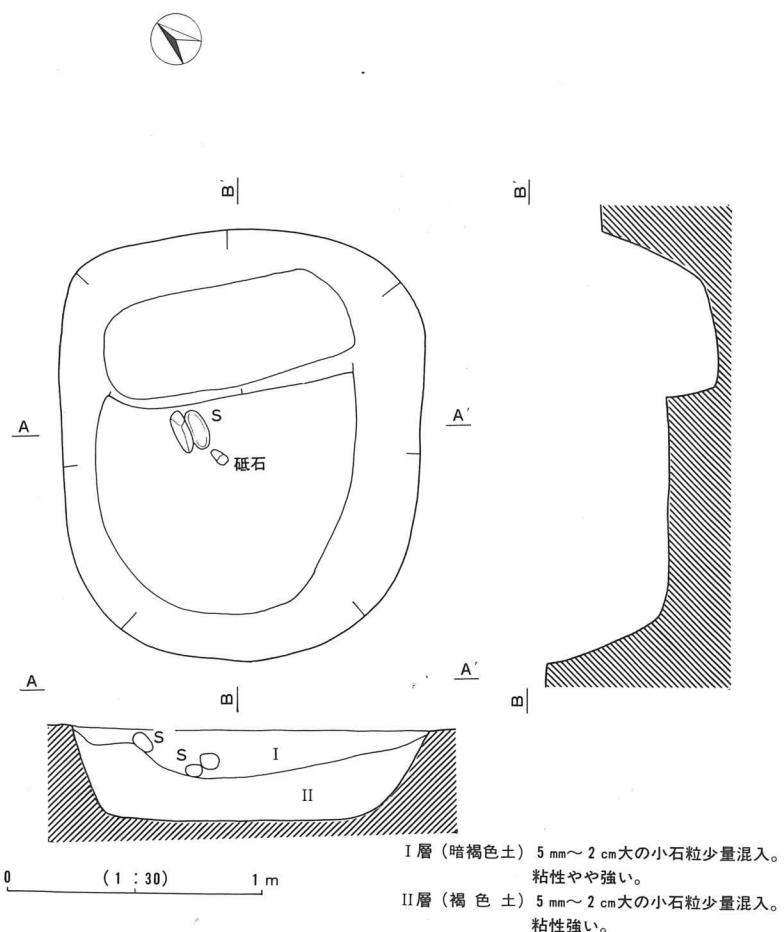
器1点、砥石1点、敲石2

点、古銭破片が出土した。

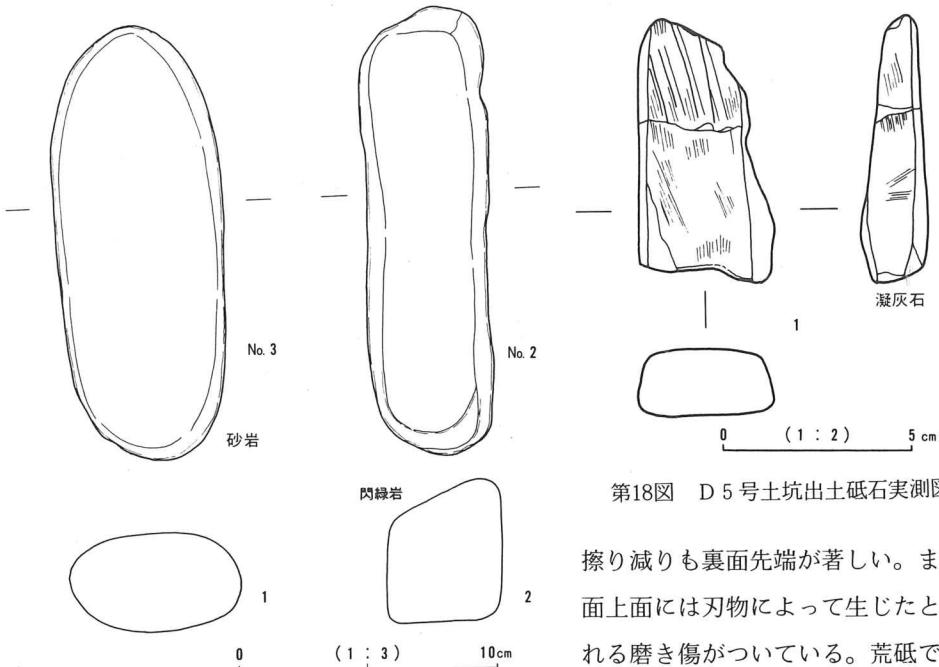
敲石は、第17図1が長さ17cm、最大幅6.7cm、厚さ3.5cmで、両先端に敲打痕があり、表裏共に中心部に磨擦痕が顕著である。また一部に黒斑が残っている。

2は、長さ17.5cm、幅4.5cm、厚さ4cmの角ばった石で、先端に少し敲打痕が残る。

この二つの敲石は、底面から15cm程上面に並べて配置してあった。意図的な配置で、該期の埋葬儀礼を知る上で注目される。また、この石のすぐ脇に、第18図に示した砥石が出土している。両先端と右側面が割れている。



第16図 D 5号土坑実測図 (1:30)



第17図 D 5 号土坑出土石器実測図

第18図 D 5 号土坑出土砥石実測図

擦り減りも裏面先端が著しい。また、正面上面には刃物によって生じたと考えられる磨き傷がついている。荒砥である。

古銭は、左半分の破片で元○○宝の二字のみ残っている。元のつく古銭は四種

類ある。この内、「元豊通宝」が発掘調査では一番多く出土している。次いで、「元祐通宝」となる。

(油井 秀雄)

6) D 6 号土坑 (第19図)

本土坑は、D 2 号土坑の東南コーナー寄りに検出され、北東寄りにD 7 号土坑が位置している。グリッドは、D—5 内にあたる。

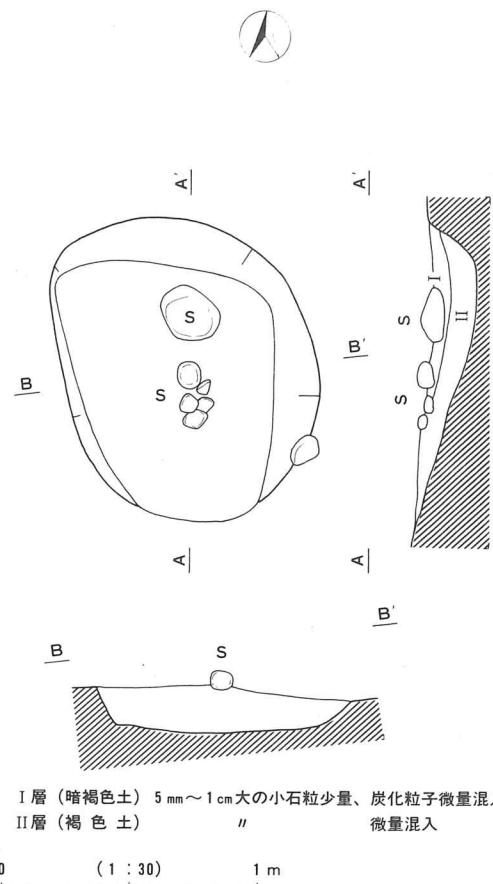
平面プランは、長径をとる南北側が 1.2 m、短径の東西側が 1 m を測る。耕作によって南側の上場が削り取られてしまっているが、北側がやや角ばった方形プランとなる。

覆土は、褐色土を基調とした 2 層で覆われ、I 層がやや黒味がかった暗褐色となる。I・II 層共に 0.5 ~ 1 cm 大の小石粒を混入し、I 層中には炭化粒子が微量混入していた。

最深部は 20 cm と浅いため壁はなだらかに立ち上っている。底面は平坦ではあるが南側がレベル的に 18 cm 程深いので、やや南側に掘り過ぎた感を呈する。長軸方向は N—5°—W を示す。

出土遺物は、内耳土器片 2 点と土坑内に安山岩・砂岩を主体とした河原石が 6 点配石されていた。北壁際中央の礫が 20 × 25 cm で最も大きい。少し離れて 5 ~ 10 cm 大の石が 5 点集石している。中には磨石として利用したとおもわれるスペスペした破片もあった。やや貧弱ではあるが D 5 号土坑と形状が似ている。

7) D 7号土坑 (第20・26・27図)



第19図 D 6号土坑実測図

土器は3点出土した。第26図5に内耳土器口縁部を図示した。直線的に立ち上る口縁でロク口痕の稜が目立つ。また、平行叩目文が顕著にあらわれている須恵器甕片が出土している。伝世品であるとおもわれる。

第27図3は、南側先端付近から出土した。長さ13.5、幅6cmの白黄色を呈し形状も整っている敲石状の礫で、意図的に選別して遺構に配石したと考えられる。石質は凝灰岩である。

また、プラン確認面より歯の付いた動物の下顎とおもわれる部分の骨が出土している。このように本土坑内には、焼土の散布、古銭、動物の骨、両耳土器片、須恵器片、配石など多様な様相が伺える。

8) D 8号土坑 (第21・26図)

本土坑は、D 7号土坑の北側直線上に位置し、グリッドはE—4内にあたる。

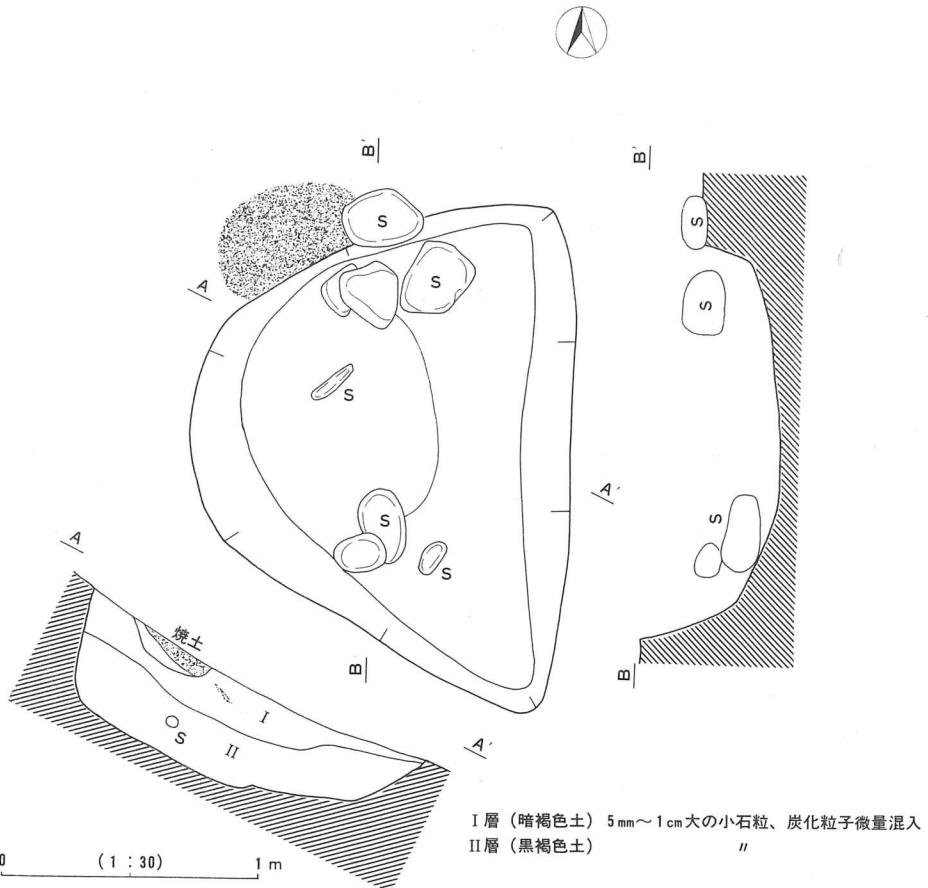
本土坑は、D 6号、D 8号、D 9号土坑が周囲を巡る中心部に検出された。グリッドはE—4・5内に位置している。

平面プランは、頂点が丸味をもつ三角形を呈し、1辺が最大幅2mで他2辺は各々1.7mを測る。プラン確認時、北西側に40×60cmの範囲にわたって焼土が堆積していた。その際に20×30cm前後の河原石が3個顔を出していた。また、形状が三角形を呈している関係から、あまり例を見ないため何度も精査したが、どうしても三角形となってしまった。

覆土は2層で、I層は暗褐色土であるが、II層はI層より黒味がある。0.5～1cm大の小石粒と炭化粒子を微量混入する。

深さは、西壁側に1.1×0.7mの範囲が深く掘り込まれて50cmで、南東側は30cmとなる。壁は急傾斜で立ち上っている。

遺物は、焼土が堆積していたすぐ際から二枚重なった状態で古銭が出土した。「朝鮮通宝」1423年発行と「成平元宝」北宋999年発行とがあり、出土例の少い古銭である。



第20図 D 7号土坑実測図

平面プランは、南北側105cm、東西側115cmを測り、北側が角ばった不整な円形を呈する。覆土は、褐色土を基調とした2層から成り、1~2cm大の小石、砂、炭化粒子を多量混入していた。確認面とI層とII層の間には炭化材が帶状に入っていた。

深さは25cmで、壁は急傾斜をもって立ち上っている。底面は平坦であるが北西コーナー寄りに内耳土器の底部2点と、中央に第23図に示した敲石状の礫が6点配石されていた。埋葬儀礼に関連した配石であるとおもわれる。長軸方向は、N-13°-Eを示す。

遺物は、底面に配石されていた礫6点と、両耳土器底部2点の他に覆土中より胴部1点、第26図6に示した底部1点、黒曜石剝片1点が出土している。

第23図の礫は、砂岩・安山岩を主体としているがそれぞれ色も異なり形もバラエティに富んでいる。長さは13~17cm、幅4.5~6.5cm内外である。1は、両先端に敲打痕が認められると共に表裏面も磨られておりスベスベしている。2・3・5・6も同様の痕跡が認められるが、この内3と

5は黒いタール状のものが付着している。特に3は赤味が加って熱を受けた様相が伺える。4は、断面四角形の石で黒味がかった細粒砂岩である。

このように礫と土器を意図的に並べ、また炭化材が覆土中に多量混入していることは、埋葬にあたり火を燃やしたことでも考えられて興味深い。

9) D 9号土坑（第22・24図）

本土坑は、プラン確認面から焼土が南東コーナー側に散布し、一面漆黒色で覆われていたため容易にプラン確認に至ることができた。グリッドは、E・F-4に位置している。

平面プランは、長径1.5m、短径1mを測り長方形を呈する。

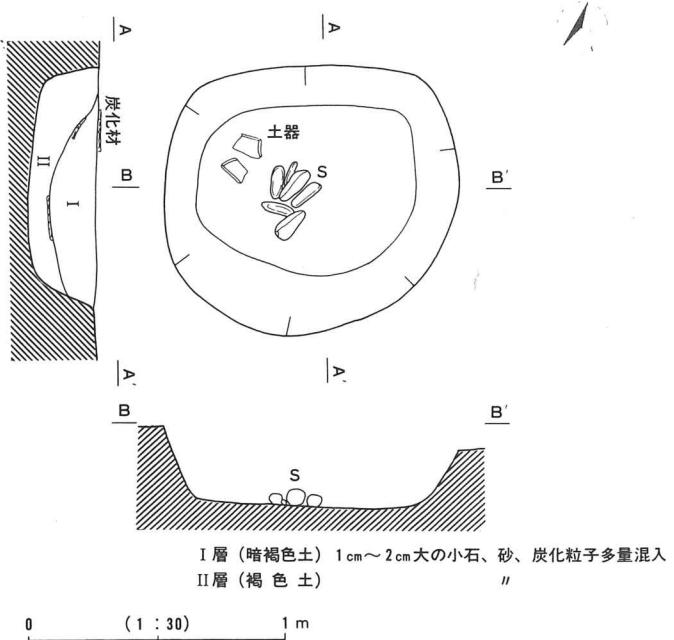
覆土は、全体に炭化粒子を多量含む漆黒色を呈したI層と、1~2cm大の小石粒を多量混入したII層から成る。

深さは、最深部で25cmを測り、壁はやや傾斜をもって立ち上る。底面はほぼ平坦であった。

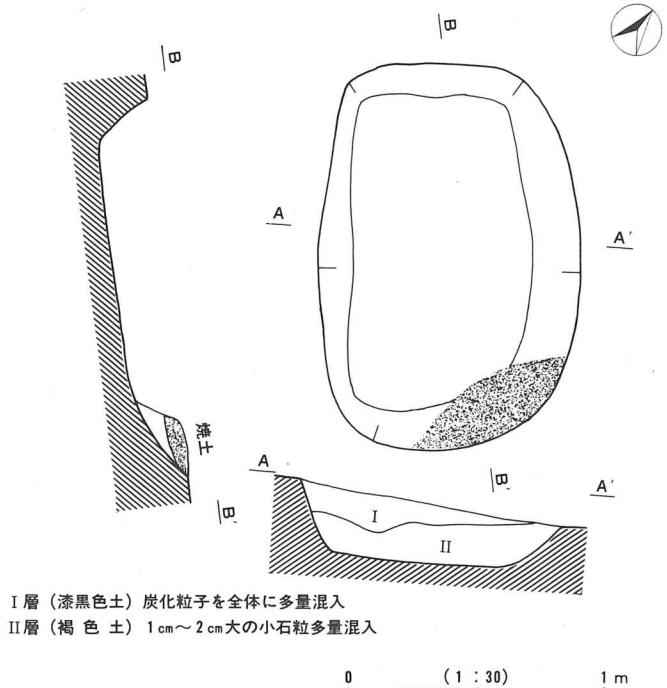
出土遺物は、覆土内から内耳土器胴部1点、底部1点、鉄釘1点が出土した。鉄釘は、第24図3に示したが腐蝕が著しい。断面四角形であるため遺構の時代と重なると考えられる。

本土坑は、上面に焼土が散布し覆土I層が炭化物の浸み込んだ漆黒色であった関係から埋葬において火を燃やした可能性が高い。

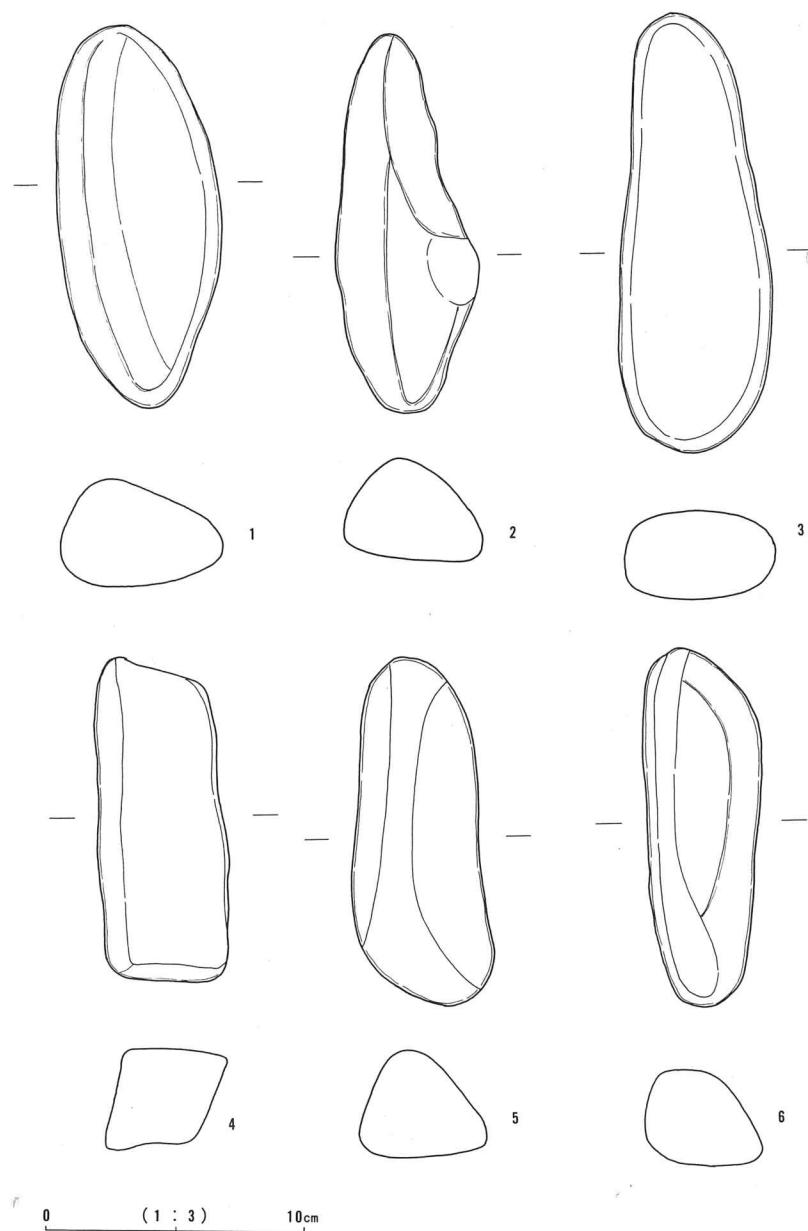
(島田 恵子)



第21図 D 8号土坑実測図



第22図 D 9号土坑実測図

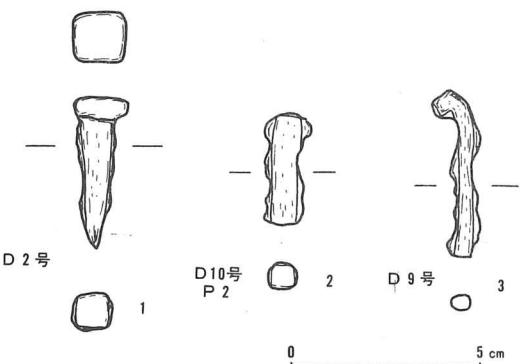


第23図 D 8号土坑出土配石礫実測図

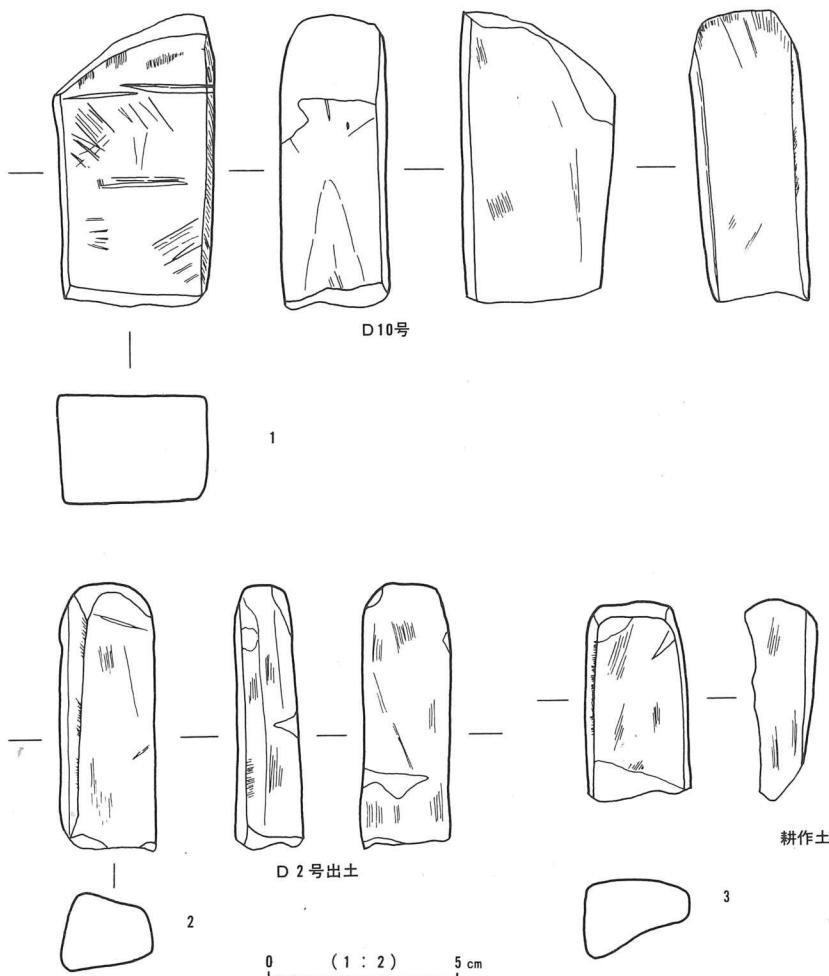
10) D 10号土坑 (第14・24~26図)

本土坑は、H 1号住居址、D 3号土坑を切って構築されており、この重複関係においては一番新しい遺構である。グリッドは、C-1・2内に位置している。

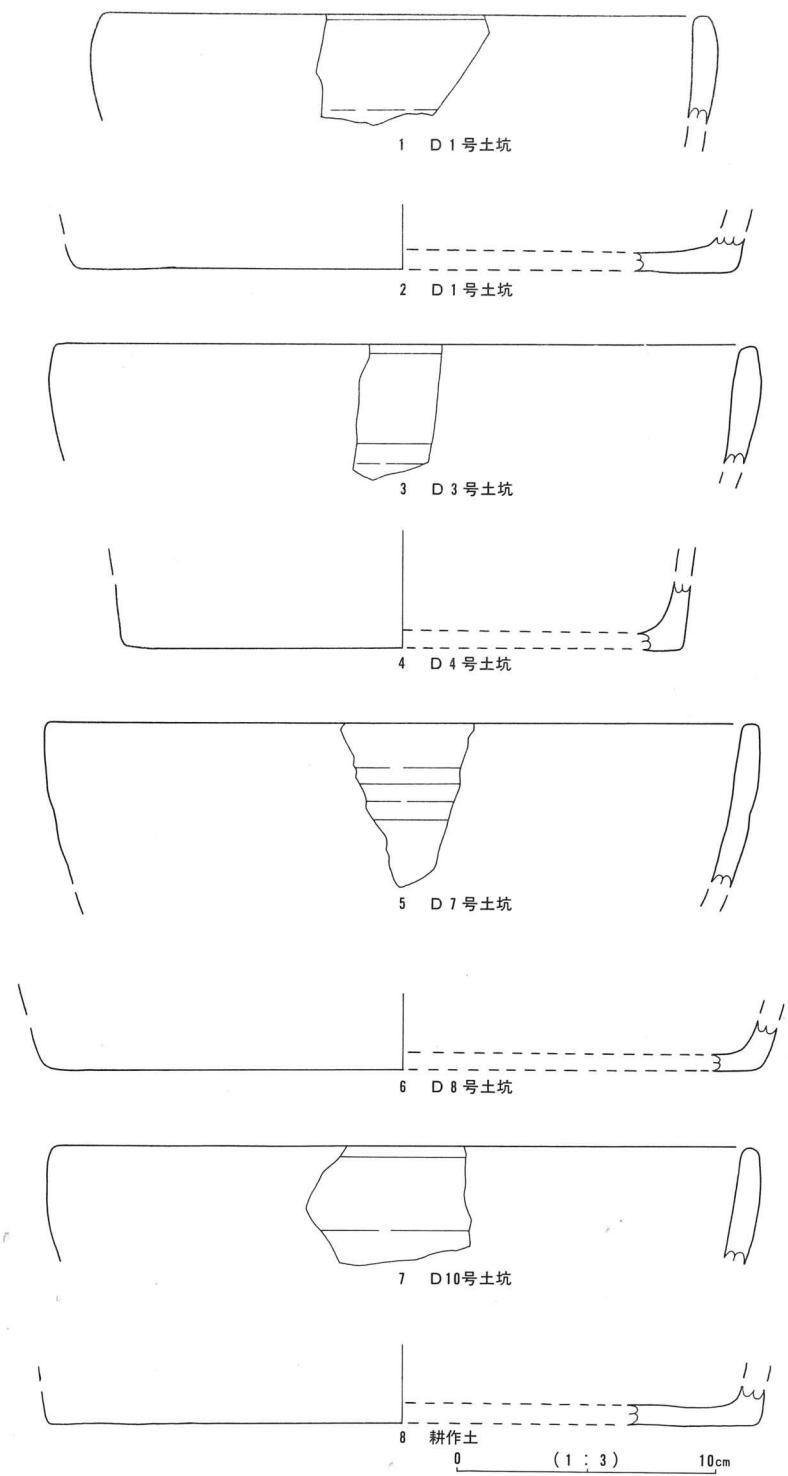
平面プランは、長径 1.2 m、短径 90cm を測り長方形を呈する。覆土は、重複しているD 3号土坑とあまり変化がみられなかつたが、II層の色調がやや黒味が強い。砂や小石粒の混入が多く、炭化粒子が I 層中に微量認められた。



第24図 土坑内出土鉄器実測図



第25図 土坑内出土砥石実測図



第26図 土坑内出土土器実測図

深さは、27cmを測りD3号土坑面よりやや深く掘り込まれていて、重複状態はここでしっかり確認できた。底面は平坦であり、壁は垂直に立ち上っていた。

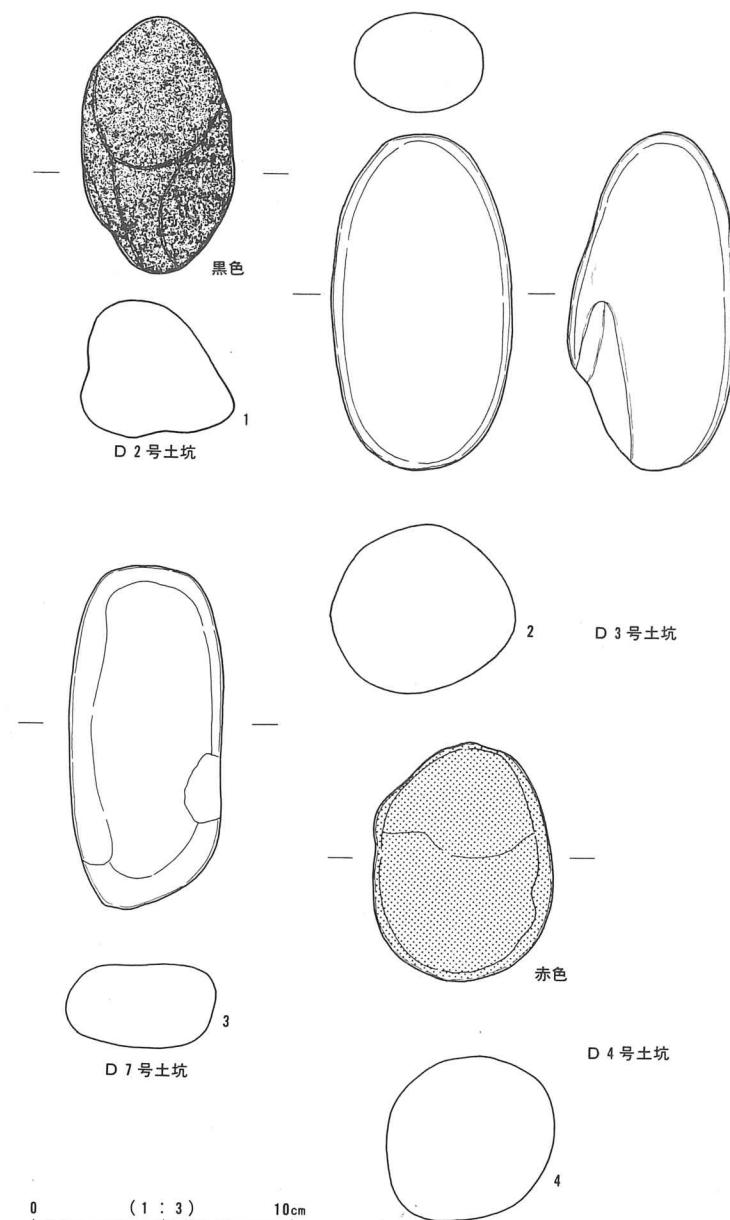
遺物は、北西コーナー壁際から、土器、砥石、古銭がまとまって出土した。

第26図7に内耳土器口縁部を示した。口縁部が直立して立ち上る器形である。この他胴部片3点が出土している。土器は正面に煤の付着が著しい。

砥石は、本遺跡出土の中では最も幅が広く3.5cmを測る。両先端は割れていて現存の長さは7cmである。断面四角形を呈し厚さ2.5cmとなる。あまり目立った磨き減りは認められないが、左側面がやや凹んでいる。

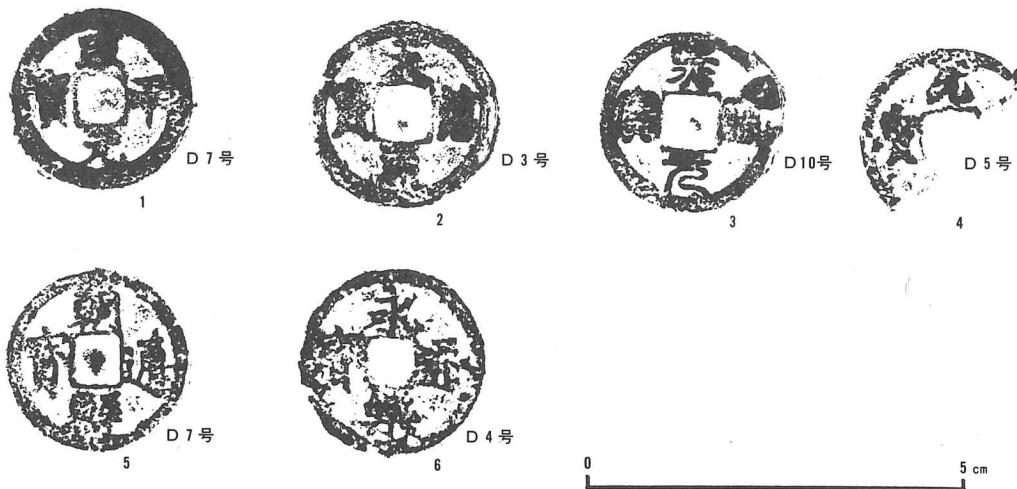
古銭は、篆書の「熙寧元宝」で北宋1068年発行である。おそらく鋳写しビタ銭であろう。

また、これら土坑をとり囲むように検出された柱穴の内、30×40cm、深さ30cmのP₂から釘のような破片が出土した。第24図2に示してある。現存長さ2.8cm、断面四角形で幅0.6cmである。P₁からも内耳土器胴部片1点が出土している。柱穴の規模もP₂と同じである。



第27図 土坑内出土礫石器実測図

(佐々木 春蔵)



第28図 七曲り下遺跡土坑内出土古銭拓影図

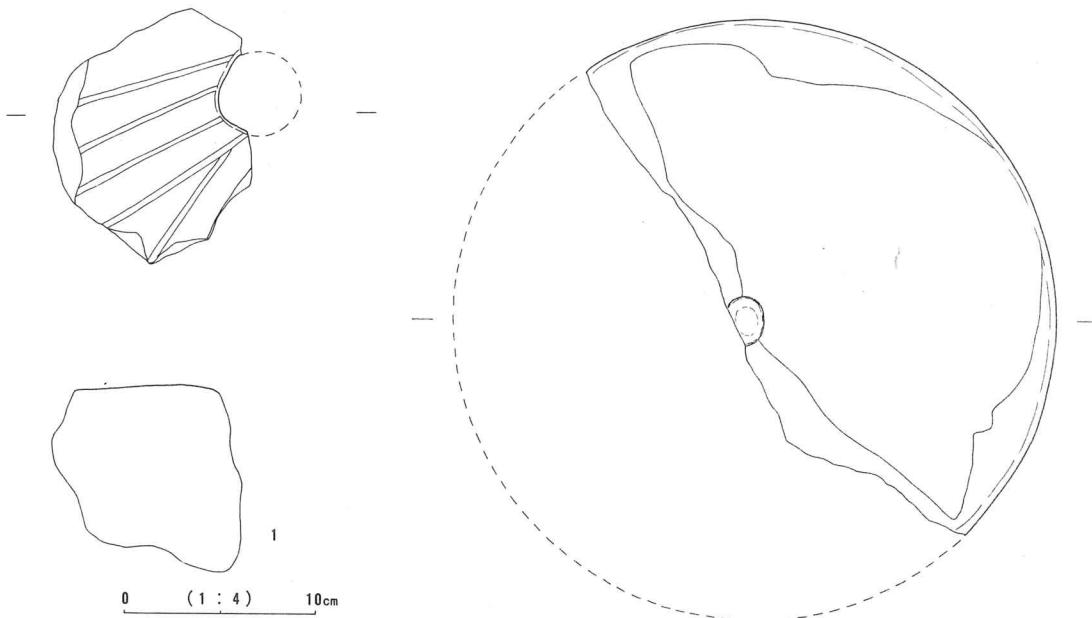
第2表 七曲り下遺跡土坑内出土古銭一覧表

挿図 番号	錢名 (字体)	初鑄年(西暦)	時代	法量		背文	出土遺構	備考
				直径	重さ			
—1	咸平元宝 (真書)	真宗咸平元年 (999)	北宋	24.0	3.00 ^{mm} g	—	D 7号	No. 5と連銭
—2	天禧通宝 (真書)	天禧年間 (1018)	〃	25.0	2.10	—	D 3号	
—3	熙寧元宝 (篆書)	神宗熙寧元年 (1068)	〃	25.0	3.30	—	D 10号	
—4	元〇〇宝	—	—	—	—	—	D 5号	
—5	朝鮮通宝 (真書)	1423	朝鮮	25.0	3.65	—	D 7号	No. 1と連銭
—6	永樂通宝 (真書)	永樂六年 (1408)	明	25.0	3.70	—	D 4号	

3 遺構外出土石器 (第29~30図)

七曲り下遺跡調査区から石臼の破片2点が出土している。第29図1は表土削平後調査区に転がっていたもので、石臼の下臼部分にあたる。芯棒孔を含んだ破片で孔は4cm前後であると推定される。すり面は磨減著しいが素材とした凝灰岩の粒子が荒いため粗悪品に見える。溝は、中心部1.5cmの間隔で刻み込まれている。

2は、畑の隅に転がっていた下臼で、真径31.5cm、厚さ11cmを測る。すり面の磨減は少ないが全体にこぼれ割れともいべき小さな凹みが多い。凝灰岩で石質が粗いからであろう。また、芯棒孔は直

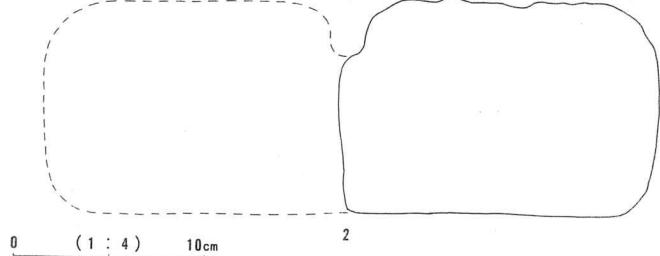


第29図 七曲り下遺跡出土石臼
実測図

径2cmの小さな孔とおもわれるが、孔の部分から割れているのではっきりしない。孔は底面まで達していないことは確かである。底部の底面は中心がややえぐられる程度ではほぼ平坦である。溝が設けられていない目なし臼である。

遺構外出土の遺物の中で第25図3に図示した砥石1点と第26図8に図示した両耳土器底部片1点、その他胴部片が出土している。

砥石は凝灰岩で、両先端と裏面を欠損し残存の長さは5cmを測る。残り三面共に磨きの光沢が若干残っている。内耳土器は底径28cmを測るとおもわれる。



第30図 七曲り下遺跡出土石臼実測図

4 七曲り下遺跡周辺の出土遺物（第31図）

七曲り下遺跡と荒谷遺跡の中間点から、第31図に示した茶臼の上臼が採集されて文化センターに展示されていたので参考資料として取り上げた。

茶臼の上臼は、上端部の上縁およびくぼみ部分を欠失し、すり合せ面はそのまま残っていた。しかし、約半分の残存である。

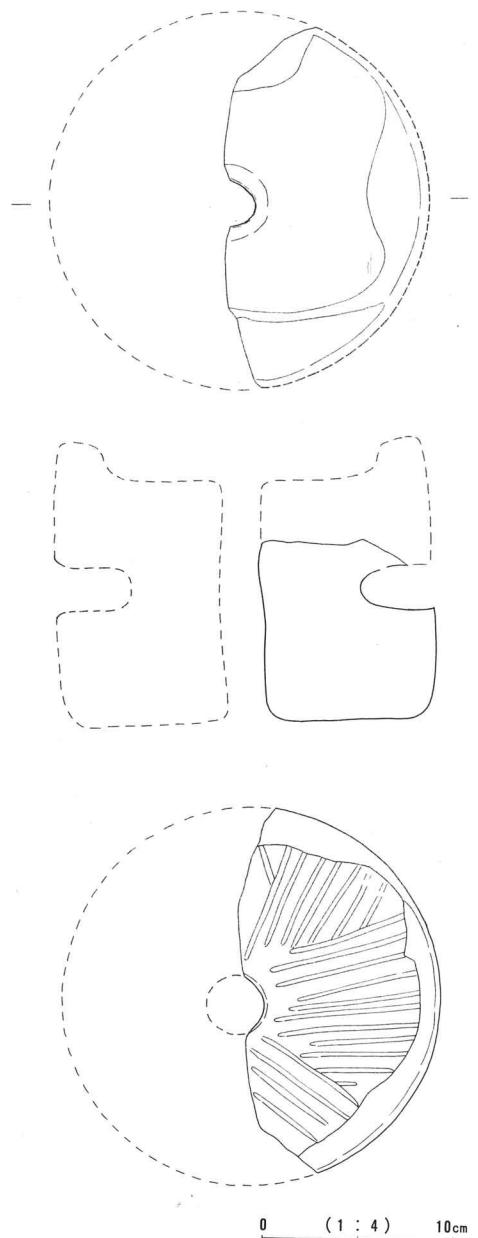
直径20cm、芯棒孔直径3cm、高さ15cm前後を測るとおもわれる。

すり合せ面には磨滅による光沢がかなり残っている。溝は六分画されていると考えられる。ふくみ幅は0.6cmである。また、側面挽き手穴の飾り模様は残っていないが、穴の痕跡は認められる。

石質は輝石安山岩である。

このように、遺跡周辺から調査区では出土しなかった茶臼が採集されていることは、遺跡の範囲が拡大されると考えられよう。

(島田 恵子)



第31図 七曲り下遺跡周辺出土茶臼実測図

第5章 考察

南佐久郡下の中世の山城は、居館址を含めて39箇所に存在する。この内、臼田町が最も多く13箇所、佐久町・八千穂村が各8箇所、小海町・南相木村が各3箇所、南牧村・北相木村が各2箇所となる。臼田町の山城は、規模・形状においては、田口城・稻荷山城・雁峯城・医王寺城などかなり整っている。ただ、稻荷山城が惜しいことに破壊されている。

本調査は、こうした山城の一角、山裾の一部分に考古学的調査を実施する事が出来た。南佐久郡下においては佐久町の中山遺跡に次ぐ貴重な調査となった。

七曲り下遺跡は、従来から弥生時代後期箱清水式土器、古～平安時代にかけての土師器が表面採集されていた。しかし、今回の調査での検出遺構は全て中世であって、他の時代との重複関係は皆無であった。そのため当時の埋葬習慣などを知る手がかりを得ることができた。ここでは土坑墓に要点をしぼってまとめを行いたい。

1 七曲り下遺跡の土坑墓

本調査で検出した遺構は、地面を少し掘り下げた地点に床面をもつ竪穴状の住居址1棟と土坑墓10基を調査した。住居址はあまり良好な状態で遺残していなかったので不明な点が多い。

土坑は、形態、大きさ、深さなどは、それぞれが異なり統一性がない。不整な楕円形のD1号土坑、大形で形の整ったD2号土坑、長方形を呈するD3号・D4号・D9号・D10号、方形はD5号、D6号土坑、不整な三角形はD7号土坑、不整円形はD8号土坑である。

土坑の長軸方向は、東側方向に傾いているD3号、D4号、D5号、D8号、D10号がある。西方向は、D2号、D6号、D9号で、東西いずれかに傾いている。また、土坑の形態は主軸方向先端あるいは後端いずれかが角ばった形状にある。平安時代までの土坑では角は丸味を帯びている形状が多い。佐久市大井城跡の土坑も角ばった形状が多くみられる。

土坑内部の掘り方は、完全に二分割されたD2号、D4号がある。D2号は配石された部分と空白の部分とに区分され、空白の部分は深い。D4号はさらにはっきりと区分されている。炭化材の散布した部分は浅く、もう一方はかなり深く不整な方形状に掘りこまれていた。埋葬儀礼の中で死者を埋めたところと、副葬品あるいは墓前祭的な儀礼を行ったところとに区分されている様相が伺える。また、このような儀礼に類似した土坑は、D1号、D7号、D9号があげられる。D1号土坑は、坑内底面から少し上った部分に炭化材・焼土の散布があり、D7号、D9号は、土坑上面に焼土が散布していた。

D5号、D6号、D8号土坑は、坑内に礫が配石されていたことが共通している。礫の配石はD2号土坑が最もダイナミックになされているが、この三つの土坑は長細い敲石として使用

第3表 七曲り下遺跡検出土坑一覧表

遺構	平面形態	長軸	短軸	深さ	長軸方向	備考
D 1号	不整橢円形	290cm	150～240cm	38cm	—	不整な出張がある 炭化材・坑内に散布
D 2号	円形	280	280	46	N-37°-W	配石、搗き臼、茶臼状の石器 含む
D 3号	長方形	(120)	80	50	N-40°-E	1号住、D 10号と重複
D 4号	長方形	280	180	25～60	N-46°-E	炭化材散布
D 5号	方形	170	140	40	N-48°-E	敲石、砥石を配石
D 6号	方形	(120)	100	20	N-5°-W	配石
D 7号	不整三角形	200	170	30～50	N	上面に焼土配石
D 8号	不整円形	115	105	25	N-13°-E	底面に土器底部と敲石状の礫 を配石
D 9号	長方形	150	100	25	N-40°-W	上面に焼土散布
D 10号	長方形	120	90	27	N-35°-E	1号住、D 3号と重複

していたとおもわれる選別された礫が使われている。特にD 8号土坑は底面に土器底部片と共に中心部に並べられていた。D 5号土坑もD 8号土坑と同様の細長い敲石を転用しているが、その配石は2個で数も少なく底面から17cm上部に並べられ、すぐ脇の下部に砥石も置かれていた。D 6号土坑は大きな安山岩の河原石と不揃いの小さな石が5個まとまって上面に配石されていた。北側の確認面に焼土が堆積していたD 7号土坑内にも、上面に3個の河原石が配石され、先端付近の底面に2個の河原石が置かれていた。この土坑は三角形を呈している。

以上、本調査で検出した土坑の形態、内部の掘り方、配石、焼土・炭化材散布の状況をみてきた。本調査での土坑のパターンは、1、埋葬部分と副葬または墓前祭などを行った部分と二分割された掘り方がみられる。2、土坑内に配石が多い。敲石として使用された石を転用して配石した土坑と河原石を上面に配石した土坑に分けられる。3、土坑上面に焼土、炭化材が散布している。また、土坑内に焼土・炭化材の散布がある。以上大きく三タイプに分けられる。

土坑内からの出土遺物は、内耳土器片が全ての土坑内から出土している。古銭は、D 3号、D 4号、D 5号、D 7号（2枚重ね）、D 10号に出土し、全て覆土最上部の壁際から発見されている。砥石は、D 2号、D 5号、D 10号から出土している。鉄器は、D 2号、D 9号土坑からとD 10号と関連すると考えられるP₂の柱穴から出土した。また、D 2号土坑のように大きな

河原石の配石の中心に、搗き臼、茶臼上臼状の形態の破片が据えられており、さらに、確認面から出土した凹石と棒状の磨石が発見されている。

これらの遺物は、D 8号土坑にみられた底面に礫と共に並べられていた土器底部片のように、古銭、砥石、搗き臼、茶臼上臼状の破片は共にその様相から意図的に副葬されたと考えられる。特に、D 8号土坑は筆者が関連した川上村三沢遺跡の縄文中期のD 2号土坑に酷似していたので、発掘調査時に縄文時代から中世に至るまで日本古来の土坑墓の埋葬方法のあり方に変化がないことを知って感動したのであった。そしてまた、銭を墓に埋めることは、現在棺の中に三途の川をわたる時に支払うわたり賃としてお金を inserer の風習と変化がないことにも気が付いた。すでに中世からこの風習の萌芽があったのであろうか。今回の調査はほんの一部分ではあったが、未開拓の中世の土坑墓のあり方を解明する糸口を与えてくれた。また、文献に登上する「臼田城」「桜井山城」の所在地を明確にするためにも大きな示唆が与えられた。これについては稿を改めたい。

本調査にあたっては、地元、下荒、中荒、上荒、伊勢町、諏訪町、美里、住吉のふるさとを愛する会（会長北原佐久生）の皆さん、黒岩盛雄議員さんの文化財を守るあたかいで理解によって調査が実施できました。会の皆さんと共に周辺一帯の歴史環境の踏査も行なうことが出来、大変有意義な勉強をさせていただくことができました。また、文化財を大切にする姿勢にも心打たれると共に、将来私達住民一人一人の文化財に対するるべき姿がここに生きていることを教えられました。深く感謝申し上げます。
(島田 恵子)

2 医王寺城とその城主

塩山向嶽禪菴小年代記、天文9年（1540）の条に、「四月上旬、板垣駿河守、信虎（武田）の命を承り、大将となって信州佐久郡に出張。臼田・入沢の両城を始めとして、数十城を攻め破り、前山の城を築いて在陣す。」とある。これが臼田城の初見である。江戸時代の天明9年（1785）正月、中之条代官守屋弥惣右衛門の巡見にあたり、臼田村からの差出文書「御尋につき、書付をもって申上げ奉り候」には、「字下ノ条、古城跡一ヶ所、臼田村地内、これは私ども居村より西に相当り、端山へ引上り候場所にて、御通筋に相見之申し候」とある。この古城跡が現臼田町臼田の西方、医王寺背後の山上にある。現在の医王寺城をさしているものであることはまちがいない。旧臼田村ではこれが唯一の山城で、これ以外には城跡は存在していない。

臼田町の南方、現在の稻荷山に存在する山城（現在は稻荷山城跡とよばれている）は、その多くが勝間村地籍に属し、戦国時代には勝間反砦、または勝間城とよばれ、臼田城とは異なるものである。

『千曲之真砂』卷八、「荒城・稻荷山城」の項に「臼田村日影山觀音崖山巔の城跡を荒城と

よび、稻荷山にも城跡があり、これは出丸であると旧記に記されているが、古考は「稻荷山城跡は出丸ではない。信玄が度々陣場とし、堀・柵、石垣等も堅固な要害であるといっている」と記し、さらに、案するに「稻荷山頂の城跡は勝間反と称したものであろう。ここは勝間反に近く、たしかに勝間反砦であろうが、なお後の参考をまつ」とも記している。

なお高野山成慶院日牌記に「全春禪定門、永祿十年丁卯八月廿一日、信州佐久郡臼田村桜井対馬守、妙徳禪定尼 永祿十二年己巳七月十三日 信州佐久郡臼田村住桜井対馬守内方」と記されている。

「平賀成頼佐久郡平釣絵図」には、「七百貫文 臼田 臼田佐渡守」「三百貫文 勝間荒城 桜井但馬守」と記されている。つまり臼田城主は臼田佐渡守で、その所領は700貫文である。それに対して、勝間（荒）城主は桜井但馬守で、その所領高は300貫文であるというのである。

臼田城と勝間反砦（現稻荷山城）について、『千曲之真砂』と『平賀成頼佐久郡平釣絵図』の記述をとりあげてみたが、両者の間にも、城の名称や城主の氏名について、相違や矛盾した記述があることがわかる。ついでにもう一つの資料として、佐久町上区郷倉所蔵の「天正十年五月二八日、信長の将森庄蔵が巡見の際に差出した一郡絵図」と註記された佐久郡絵図には、現稻荷山城跡に「勝間、桜井山」、現医王寺城跡に「臼田、鮎沢古城」と記されている。以上の記述から総合してみると、現在の医王寺城跡と稻荷山城跡の戦国時代の城名は、医王寺城は「臼田城」であり、稻荷山城は「勝間反砦」（又は勝間城）である。現在の医王寺城、稻荷山城の名は江戸時代以降、近世に入ってからの名称と思われる。「荒城」の名は臼田城（「千曲之真砂」）と、稻荷山城（「勝間城」）の両方に用いられているが、これも近世以降になっての名称と思われる。「勝間 桜井山」の記述は佐久町上村の天正古図にだけみられるが、それについては後述する。

『信陽雑誌』享禄元年（1528）の条に「当時佐久小県攻戦地散在之士」として列挙したなかに村上源五郎顕胤があり、その註に「不詳、或は臼田城跡」とあり、不詳ながら村上顕胤が、臼田城主であった可能性について記している。臼田の井出氏の祖が、天文12年（1543）ごろ駿河国富士郡井出村借宿から佐久にきて、臼田町寺久保の古屋敷に居住したのが上ノ城（医王寺城）であるという説もあるが、天文12年では少し後になる。村上氏の菩提寺である坂城町満泉寺の村上氏系図では、顕胤は顕国の子で、義清とは兄弟である。享禄3年9月、村上五郎源顕胤は高野山蓮花定院に「拙者領分之僧俗貴賤共、他宿有るべからず候」と宿坊約定書を出している（『蓮花定院文書』）から、所領地の特定はできないが、当時顕胤が小県佐久地方のどこかに所領をもつ領主であったことは確かである。蓮華定院は古来信濃国佐久・小県両郡を檀那とした寺院であった。

臼田城跡（医王寺城跡）の西方尾根上には経塚古墳があり、付近を上ノ城とよび、烽火台跡と伝承している。佐久平を一望する景勝地で、東方は千曲川畔の平地を隔てて田口城跡と相对

し、片貝川の下流約4kmには伴野氏の居城前山城がある。城の構えは大きくて古い。『南佐久郡古城址調査』は、村上氏は文明16年（1484）佐久に侵入して大井氏を降したが、その後延徳元年（1489）6月、甲斐武田氏が佐久に侵入するに及び、村上頼国は兵を出し、佐久の諸豪を援けて武田軍を撃退したから、佐久の諸豪は多く村上に属するようになった。そこで頼国はその子頼胤に、臼田城を築かせ、それを居城として佐久地方の押さえとして、武田氏に備えた。と記している。この城跡は三つの郭と深い堀切、数段の腰曲輪を構え、さらに烽火台を設けた大規模なもので、たしかに村上一族の重鎮の居城としてふさわしいものに思われる。しかしここは伴野氏の本城前山城からわずかに一里、しかも前山城を南方からおさえこむような位置にある。ここに村上氏が城を構えることは、伴野氏の存立を危うくするもので、当時の佐久の情勢を考える上で、重要な問題をもっている。村上氏がここに居城していたとすれば、天文9年武田信虎の佐久侵入の際、その攻撃の重点目標となり。「臼田・入沢の両城をはじめとして」と、甲州方の塩山向嶽禪庵小年代記に記されているのも当然のことである。落城後は村上氏は佐久の地を去った。

今回の発掘調査は臼田城跡の山麓、医王寺墓地の北に隣接する畠地で行なわれたが、その出土遺物から、中世末期の庶民の墓坑であることが確認された。恐らく臼田城に関係ある当時の人々の墓と考えられる。付近の雑木林におおわれた医王寺墓地の一角に、現在臼田町に居住している桜井氏の墓地があって、数基の五輪塔を含む古い墓石が印象に残った。村上氏の敗退後は臼田城は、武田氏によって伴野氏の管理下に置かれたものと思われるが、その城主または城代が、桜井氏か、臼田氏か、井出氏であったか或は他の某氏であったかは明かでない。桜井対馬守の高野山成慶院の月牌は永禄十年八月となっているが、永禄10年（1567）の生島足島神社の信玄武将の起請文には桜井氏、井出氏の名は見られない。しかし、小林左衛門盛重ら佐久郡北方衆七人の連名の中に臼田佐渡守吉景があり、野沢衆六人連名の中に臼田善右衛門尉満口がある。このほか臼田氏には天文23年（1554）6月11日に武田晴信から、岩村田に替地を与えられた臼田六郎右衛門尉がある。（『信濃史料』12巻）これらの臼田氏が臼田城と関係があるかどうかは今後の研究課題である。

臼田城跡（現医王寺城跡）に関連して、現稻荷山城跡（勝間反砦）についてその概要を記せば次のようである。

勝間反砦の初見は天正10年（1582）で、この年6月織田信長が殺されると、北条氏直が関東の大軍を率いて佐久平に侵入し、佐久の豪族はみな北条に属し、依田信蕃だけが徳川家康に属して、春日三沢小屋によって抵抗した。北条氏の大軍はさらに甲州に侵入し、若神子で徳川軍と対陣した。『武徳編年集成』等によれば、甲州の津金衆、武川衆らは徳川氏に属して、小尾、津金方面から、川上口、平沢口を突破して佐久郡に入り、勝間が反に砦を設けて基地とし、千曲川の対岸岩崎（臼田町三分）で北条軍を破った。これによって三沢小屋の依田信蕃と連絡が

について、北条軍の補給路をおびやかしたので、北条軍は撤退のやむなきに至り、北条・徳川の講和が促進された。家康は九月九日、津金修理亮胤久に機（畠）郷（八千穂村）100貫文、市ノ渕郷（佐久町）30貫文等を与えてその功を賞した。11月には松平家忠が、家康の命をうけて勝間反砦を修築した。この城は、広大な縄張りで、西方に二重、三重の濠と土居をめぐらし、その間に虎口、馬出しを設け、千人詰の広場を置くなど、攻守にわたって適応する新しい工夫がこらされている。「佐久郡城郭中の白眉とも称すべきもの」と、「佐久郡古城址調査」は高く評価している。松平家忠は徳川家臣中で、すぐれた築城家として知られた武将であった。勝間反砦の名が戦史に登場するのはこれが初めてで、これ以前に存在していたとしてもそれは小さな砦であったに過ぎないと思われる。肥前曲輪の一郭は、当時ここを守った芦田（依田）肥前守の名をとどめるものといわれる。天正古図に「勝間 桜井山」と記されたこの城を「桜井山城」とする説がある。桜井山城の初見は、高白斎記天文16年（1547）閏7月20日、武田晴信が志賀城攻めの基地として、「桜井山まで御着」の記事である。以後天文17年9月「桜井山の御判形伴野へ渡す、同18年8月26日（武田晴信）桜井山御着城、同19年11月13日村上義清（砥石城で武田晴信を破り小諸に入る）が野沢・桜井山宿城放火、同20年8月朔日、桜井山御着城」とあり。武田晴信の佐久侵略の前進基地の役割を果たしている。しかし桜井山城については上記のように高白斎記に、天文16年から同20年の5ヶ年間に限ってだけ記され、それ以前にも、それ以後にも記されることはない。また前記のように、勝間反砦が修築されたのは天正10年であって、それ以前に存在していたとしても、それは武田晴信の基地として、「桜井山宿城」とよばれるような完備した規模の城と考えることは困難である。高白斎記の記述からは、桜井山城は伴野氏の本城前山城とは至近の位置にあると考えられること。その判形が伴野氏に与えられているなど、桜井山城は前山城の別称または、その修築部分の呼称としての可能性も考えられるから、なお今後の研究を要するものと思われる。

天正13年8月大久保忠世、鳥井元忠・平岩親吉ら徳川軍が、上田城に真田昌幸を攻めたが勝利が得られず、軍を返した。そのとき大久保は真田のおさえに小諸城にとどまり、鳥井・平岩は勝間反砦に入ったが甲州へ引きあげ、井伊兵部少輔が勝間曾利（反）要害等の番手下知として残り、これを修築して真田のおさえとした。（『信府統記』による）

天正18年、豊臣秀吉が小田原攻めをきめると、関東に浪人して佐久郡還住の機会をねらっていた依田（相木）能登、伴野刑部は、北条氏直の命をうけて相木谷で兵を挙げた。これを知った小諸城主松平（依田）康国は、小諸城から一騎がけで走って勝間城へ入り、人数を調べて、これを破った。この戦いをさいごに、戦国の終結と共に勝間反砦は廃城になった。この間の城名は勝間反砦、勝間反要害 勝間城等で、桜井山城の名は一度もでない。稻荷山城の名も同様で、これは江戸時代の後半以降になってから生じたよび名と思われる。

（井出 正義）

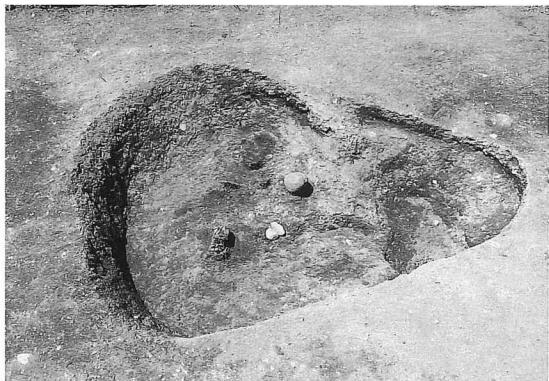


1. 七曲り下遺跡検出遺構全景（調査区北側）



2. 1号住居址、D3号・D10号土坑全景

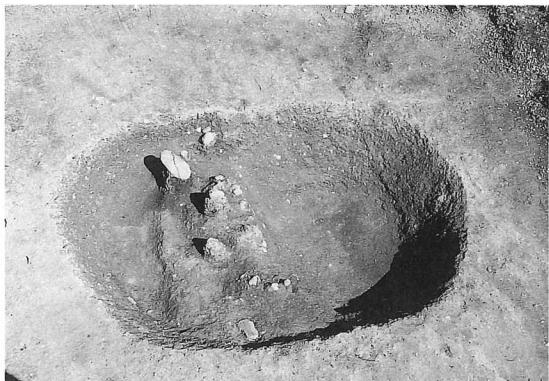
圖版
2



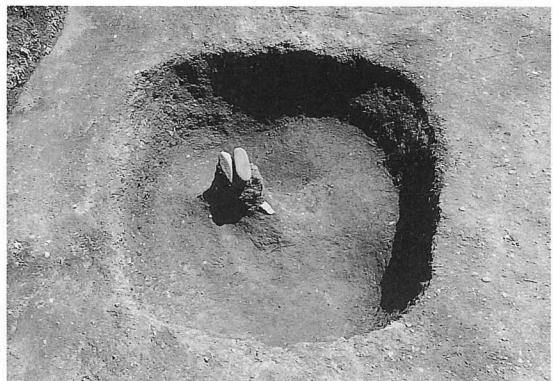
1. D 1号土坑



2. D 3号。D10号土坑



3. D 4号土坑



4. D 5号土坑



5. D 6号土坑



6. D 7号土坑



1. D 2号土坑全景



2. 捣き臼、茶臼状石器出土状態



3. 配石状態

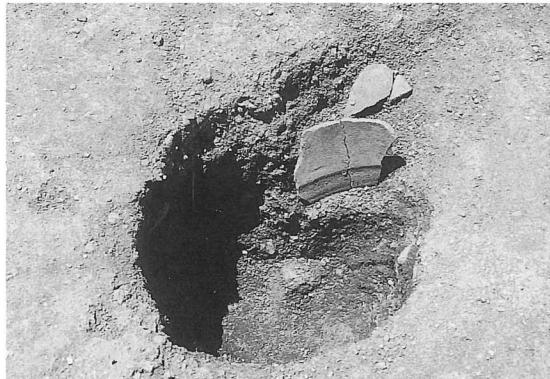
図版
4



1. D 8号土坑



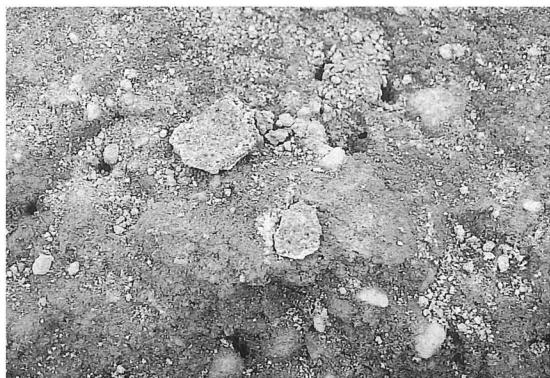
2. D 9号土坑



3. 1号住居址土器出土状態



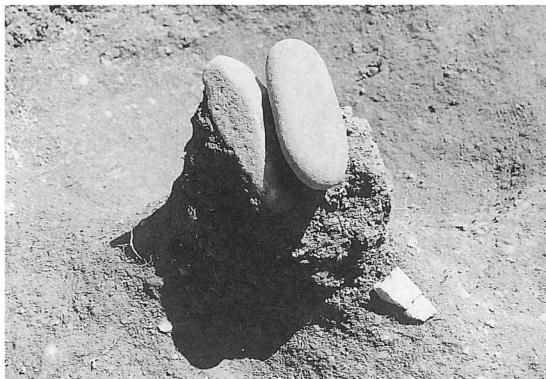
4. 1号住居址骨・土器出土状態



5. 1号住居址骨（頭）出土状態



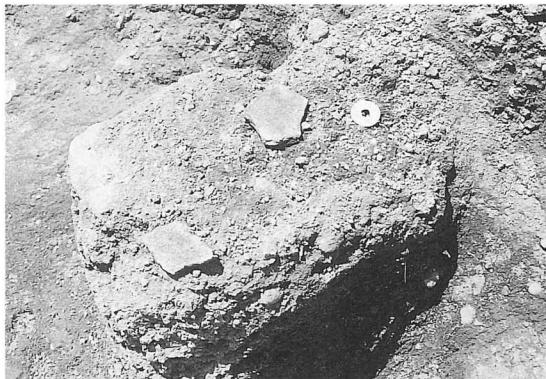
6. D 1号土坑の焼土・炭化材



1. D 5号土坑石器出土状態



2. D 7号土坑古銭出土状態



3. D 10号土坑遺物出土状態



4. 医王寺日影堂の百番観音像

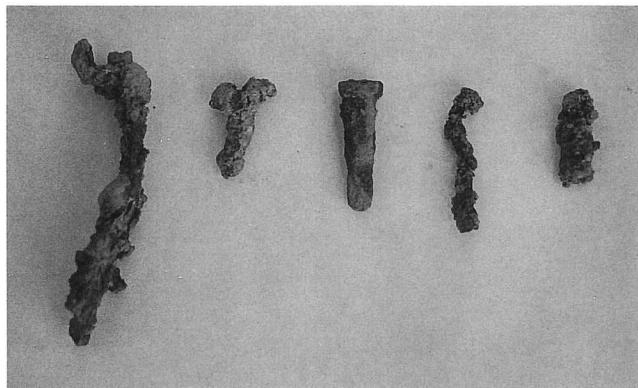


5. 調査区裏桜井氏墓地内の五輪塔

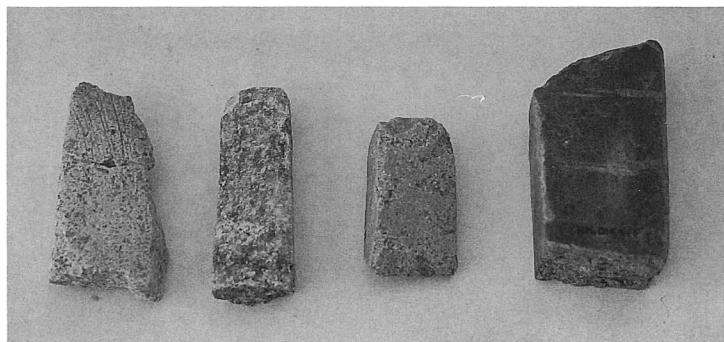
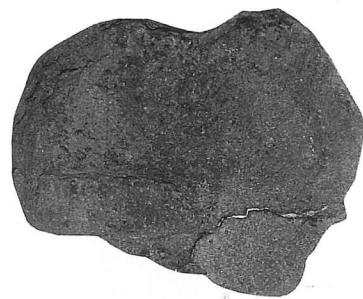


6. 医王寺境内の五輪塔残欠

図版
6



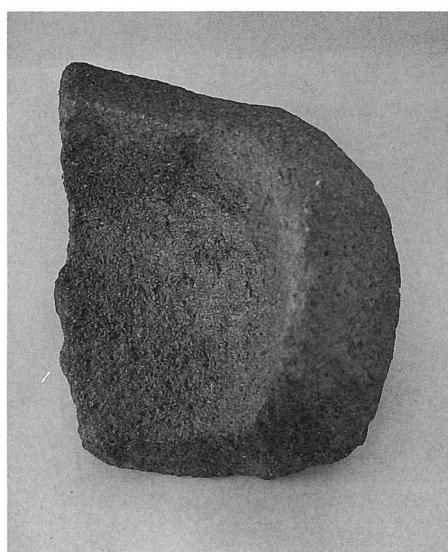
1. 鉄器 (1 : 2.5)



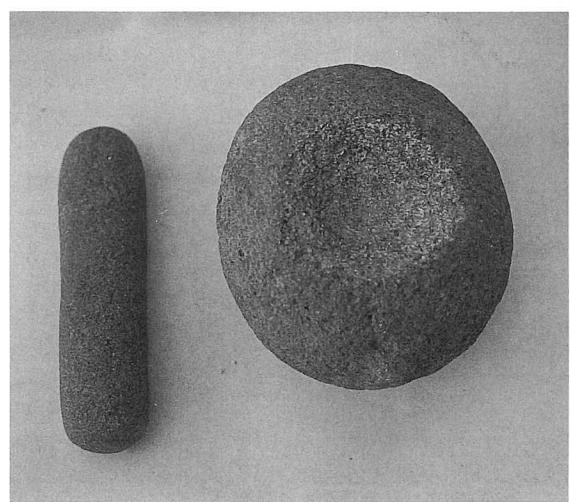
2. 磁石 (1 : 3)



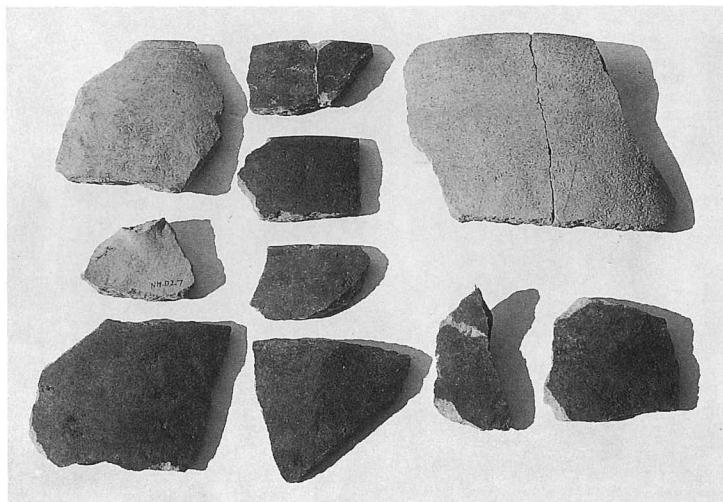
3. 茶臼上臼状石器 (1 : 4)



4. 搗き臼 (1 : 3)



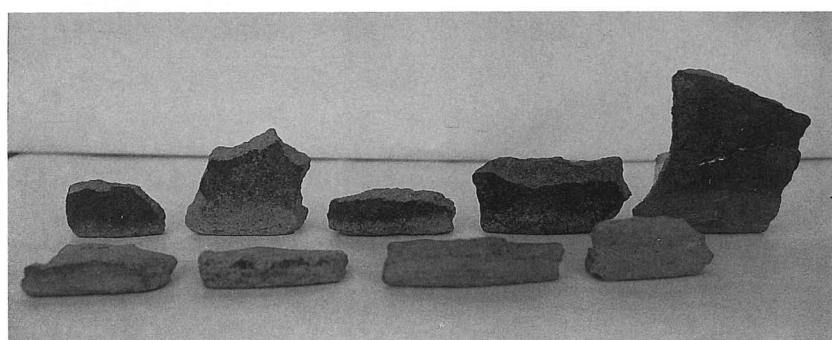
5. 磨石・凹石 (1 : 3)



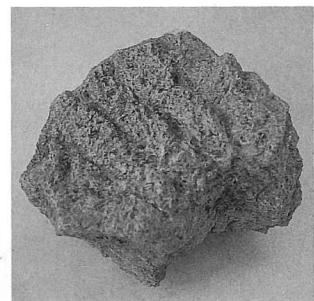
1. 内耳土器口縁部 (1 : 4)



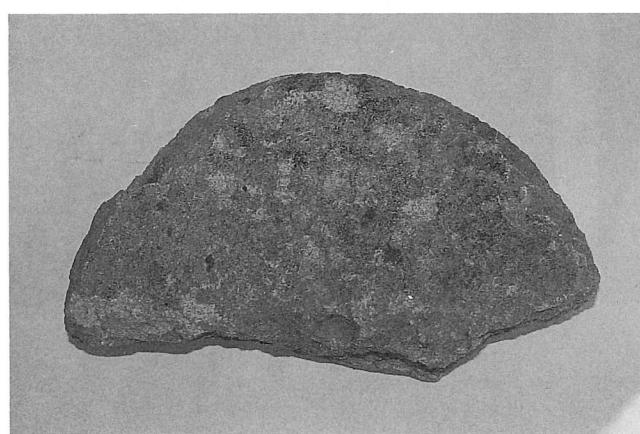
3. 茶臼上臼 (1 : 3)



2. 内耳土器底部 (1 : 4)



5. 上臼 (1 : 3)



4. 石臼 (1 : 4)

図版 8



1. 医王寺城の踏査（西山を愛する会の皆さんと本丸にて）



2. 地元の皆さんとの見学会スナップ



3. 地元の皆さんと共に周辺の歴史的環境の踏査

七曲り下遺跡

発行日 平成 7 年 3 月 20 日
編集者 七曲り下遺跡発掘調査団
発行者 白田町教育委員会
印刷所 白田活版株式会社